HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 図書館が持つ地域の情報拠点としての可能性 ： 「まちライブラリー@千歳タウンプラザ」の事例から |
| Author(s) | 松原, 彩花 |
| Degree Grantor | 北海道大学 |
| Degree Name | 学士 |
| Issue Date | 2020-03-25 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/76877 |
| Type | bachelor thesis |
| File Information | 2019amatsubara.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

令和元年度卒業論文

# 図書館が持つ地域の情報拠点としての可能性

## ―「まちライブラリー@千歳タウンプラザ」の事例から―

人文科学科　人間システム科学コース

指導教員：宮内　泰介

学生番号：01162115

氏名：松原彩花

# 目次

1.はじめに ..... 5

1-1.研究の背景と目的 ..... 5

1-2.調査地の概要 ..... 6

1-2-1.千歳市の概要 ..... 6

1-2-2.千歳中心市街地の概要 ..... 7

1-2-3.千歳タウンプラザの概要 ..... 8

1-2-4.「まちライブラリー@千歳タウンプラザ」開館の経緯 ..... 9

1-3.研究方法・調査の全体概要 ..... 9

1-4.論文の構成 ..... 10

２.図書館による地方創生の現状 ..... 11

2-1.政府が推奨する図書館の事例 ..... 11

2-2.マイクロ・ライブラリー ..... 14

2-2-1.マイクロ・ライブラリーの概要 ..... 14

2-2-2.まちライブラリーの概要 ..... 15

3.「まちライブラリー@千歳タウンプラザ」という場所の考察 ..... 17

3-1.しくみとその役割 .....17

3-1-1.蔵書 .....17

3-1-1-1.寄贈のしくみと蔵書数の推移.....17

3-1-1-2.メッセージカード .....19

3-1-2.サポーター制度 .....22

3-1-3.飲食・会話自由 .....22

3-1-4.イベント .....24

3-2.空間の役割.....25

3-2-1. 本棚 .....25

3-2-2.イベントスペース .....27

3-2-3.カフェ .....27

3-2-4.チラシ・パンフレットコーナー.....28

3-2-5.ブラックボード・ホワイトボード .....29

3-2-6.展示ブース .....30

3-3.利用者からの評判 .....31

3-3-1.開館前後のタウンプラザの変化.....31

3-3-2.最近の館内の変化.....34

3-4.小括.....36

4..図書館という「居場所」 .....37

4-1.居場所の定義.....37

4-2.人の居場所.....40

4-2-1.老若男女が集う賑わいの場.....40

4-2-2.プレイヤーが集うはじまりの場.....41

4-2-3.個人と社会をつなぐパイプ.....43

4-3. 情報の居場所 ： 情報拠点 .....44

4-3-1.ナマモノである情報 .....44

4-3-2.地域内での情報の受発信 .....46

4-3-2-1.広報誌やチラシ.....46

4-3-2-2.サポーター会議という最強の出会いの場 .....46

4-3-3.地域外からの情報の受信 .....47

4-4.居場所を生む各機能のつながり .....48

5.ライブラリーの今後.....50

5-1.スタッフとサポーターの連携.....50

5-2.タウンプラザでの存続 .....51

5-3.役割の見直し.....53

5-4.小括.....54

6.結論 .....55

謝辞 .....56

参考文献 .....56

# 1.はじめに

## 1-1.研究の背景と目的

日本で地方創生の必要性が叫ばれて久しい。主な理由として人口減少・少子高齢化という課題に直面していることが挙げられる。これに対し、政府は 2014 年９月『まち・ひと・しごと創生本部』を設置し、同年 12 月には、2060 年に 1 億人程度の人口を維持する展望を示した『まち・ひと・しごと創生長期ビジョン』を策定した。加えて５か年の目標や施策の基本的方向及び具体的な施策をまとめた「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、本腰を入れ始めている。2015 年度から 2019 年度の第 1 期では、「地方にしごとをつくり、安心して働けるようにする」、「地方への新しいひとの流れをつくる」、「若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる」及び「時代に合った地域をつくり、安心なくらしを守るとともに、地域と地域を連携する」を４つの基本目標とした。また、国のこうした枠組を踏まえ、地方公共団体において、「地方人口ビジョン」 並びに「都道府県まち・ひと・しごと創生総合戦略」及び「市町村まち・ひと・しごと創生総合戦略」が策定され、全国各地において、各地域の実情に即した具体的な取組が行われてきたところであり、国としては、こうした意欲と熱意のある地域の取組を、情報、人材及び 財政の３つの側面から支援（「地方創生版・三本の矢」）してきた。

「地方創生」「地域活性化」「まちづくり」は頻繁に使われる単語だが、これらに明確な線引きはない。私は「地方創生」を、「(1) 住民が地域コミュニティを活性化させる」「(2) 地域力を高める」「(3) 地域外からの訪問者を増やす」の 3 段階に捉えている。地域コミュニティを活性化させることで、地域活動に貢献する人材が生まれたり、地域ブランディングが行われたりして、地域力が高まる。その地域力を外にアピールすることで訪問者が増えると。関係人口や交流人口が増えることでさらに地域コミュニティが活性化するという好循環である。この循環にさらに施設の増設や公共交通機関の発達といったハード面での整備が加わると「まちづくり」になると定義する。

私の地元である千歳市の中心市街地には、大型商業施設「千歳タウンプラザ（以下タウンプラザ)」がある。約 40 年前に建設されて以降幾度となく厳しい経営状況に立たされ、今度こそは取り壊さざるを得ないと市民から諦められていたとき、2016 年 12 月に「まちライブラリー」が開館した。私はこれに際して同年 10 月から 12 月にかけて計 4 回のワークショップに参加した。ここでは参加者である千歳市民が市の未来や商店街に関する想いを語り合い、どのような図書館を作っていくかで盛り上がった。図書館を作るうえで事前に市民と深く関わり、今後の方針を決めていく様子に、私は地域活性のあるべき姿を見出し、以降 3 年間（本格的な調査は約 1 年 8 か月間）調査を行ってきた。本研究では、「まちライブラリー＠千歳タウンプラザ（以下ライブラリー)」の事例をもとに、図書館が地域の居場所として認められることで情報の拠点の役割を果たす可能性と意義を考察することを目的とする。

## 1-2.調査地の概要

### 1-2-1.千歳市の概要

千歳市は、新千歳空港を有し[1]、日々約 3,000 人もの市民が通勤通学で札幌へと流入している[2]札幌市のベッドタウンである。

人口は約 97,000 人で、比較的若年層が多い。自衛隊員が 20-30 代のうちに転入し、40 代以降に去るパターンが多いため、平均年齢は北海道で 1 番若い 43.5 歳となっている[3]。

近年のインバウンドによる日本観光・北海道観光のブームを受けて、新千歳空港の利用者、市内ホテルの利用者、支笏湖の観光客の数も伸びていることから、宿泊業や飲食業への効果は著しい[4]。また 1964 年に道央地区新産業都市の指定を受けて以来、1989 年の道央テクノポリスの指定、1993 年に千歳・苫小牧地方拠点都市地域の指定を受け、第 1～第 4 工業団地のほか臨空工業団地やオフィスアルカディアなど特色のある工業団地を造成した結果、企業進出も順調に進み道内有数の工業集積都市となっている。この結果、経済は財政指数で見れば泊村につぐ北海道 2 位となっている。

市域の面積は約 595 ㎢と東京 23 区より少し小さく、東西方向に細長く広がっている。JR が通る中心部は市街地となっており、西側は支笏湖とその周辺の国有林、東側は陸上自衛隊東千歳駐屯地、北側には石狩平野の一部を形成する農地を有する[5]。

---

1 正確には千歳市と苫小牧市にまたがって存在する。空港ターミナルや管制塔などの主要施設はすべて千歳市にあるが、滑走路の約 3 分の 1 は苫小牧市に位置する。

2 札幌市まちづくり政策局政策企画部企画課「平成 27 年『国勢調査』従業地・通学地による人口・就業状態集計結果及び移動人口の男女・年齢等集計結果の概要」

3 千歳市「町別人口統計表」https://www.city.chitose.lg.jp/fs/7/0/7/3/7/_/_____10__.pdf（最終閲覧 2019 年 12 月 13 日）

4 千歳市「千歳市を取り巻く経済等の概況について」
http://www.city.chitose.lg.jp/fs/5/1/5/1/9/_/___1_H30_____.pdf
（最終閲覧 2019 年 12 月 13 日）

5 千歳市「千歳市の都市計画」
https://www.city.chitose.lg.jp/_resources/content/37467/20150518-180840.pdf（最終閲覧 2019 年 12 月 13 日）

### 1-2-2.千歳中心市街地の概要

初期の千歳の中心市街地は、飛行場に近い本町や朝日町であった。朝鮮戦争を契機に米軍オクラホマ州兵師団 12,000 人が駐留に伴い大勢の商人が千歳に入り込み、飲食店を中心に多くの店が立ち並んだ。しかし 1955 年に大火で被災したのちにそれまで商店街のなかった幸町や清水町に移転し、現在は駅前に「駅前通り商店街」「新橋通商店街」「ニューサンロード商店街」「新川通り商店街」「仲の橋通り商店街」の 5 つの商店街が集中している[6]。また、少し離れて駅裏に「インデアン水車通り商店街」、駅前西側に「北新商店街」も存在する。

どの商店街も車中心の生活スタイルやインターネット販売の普及などにより苦戦を強いられているが、くじ引き大会やお祭りなどを開催し地元に愛され続けるよう努力を重ねている。仲の橋通り商店街は若い世代の目線が必要と考え、2018 年に札幌大谷大学の有志学生と「Happy Bridge Project」を企画し、経営手法の見直しや後述のタウンプラザでのイベントに取り組んだ。

6 なおこの５つの商店街の手前には、移設の経緯を踏まえて防火のためにグリーンベルトが設けられており、消防署も近い。

## 1-2-3.千歳タウンプラザの概要

タウンプラザは、仲の橋通り商店街のシンボルともいえる大型商業施設である。仲の橋通り商店街とニューサンロード商店街が交差する位置に存在し、施設前はバス停になっている。地上 3 階、地下 1 階の 4 階建てであり、地下は「グリーンベルト駐車場」とつながっており、悪天候の日は濡れずに出入りできる。好条件が揃っているのだが、同時期に開店したニチイ（現イオン）に品ぞろえや安さで押され、さらに次第にイオンから北西へと北海道道 258 号早来千歳線沿いに次々店舗が出店していくようになった結果、現在この線は「中央大通り」と呼ばれるまでにいたった。

**表 1. 千歳タウンプラザとイオン千歳店の沿革**

| 【千歳タウンプラザ】 | 【イオン千歳店】 |
|---|---|
| | 1978.11. 「ニチイ千歳ショッピングデパート」として開店 |
| 1982.12. 再開発ビルとして「エスプラザ」開店、「ちとせデパート」が入居 | |
| | 1996.7. 「千歳サティ」にリニューアルオープン |
| 1999.12. 「ちとせデパート」営業譲渡（自己破産） | |
| | 2002.9. 「ポスフール千歳店」に改称 |
| 2005.3. 「千歳タウンプラザ」として開業 | |
| | 2011 「イオン千歳店」に改称 |
| | 2013.10. リニューアルオープン |
| 2015.3. 一部を除き閉鎖 | |
| 2016.10~12. 「まちライブラリー」開館に向けて告知・ＷＳの開始 | |
| 2016.12. リニューアルオープン | |

（資料）『まちライブ 02』を参考に筆者作成

### 1-2-4.「まちライブラリー＠千歳タウンプラザ」開館の経緯

タウンプラザは2005年にちとせデパートからのリニューアルオープンという形で開業したが、市内では郊外大型店舗の開発が進み、市民の居住区が郊外へ移動したため中心市街地の人口が減少しているという課題を抱えていた。管理会社である株式会社セントラルリーシングシステム株式会社（以下リーシング）は、タウンプラザは収益施設としての維持は難しいものの、大型店舗にはない「人とのつながり」が生まれる素地がある潜在能力の高い施設なのではないかと考えた。経営理念の社会貢献のためできることはないかと検討を重ねるなかで、千歳市立図書館の本の貸し出し率の高さに注目した。人間の多様性と本の種類の多様性は千歳のコミュニティの多様性にマッチしており、地域活性につながる可能性があると考え、民間図書館「まちライブラリー」をメインに施設をリニューアルすることに決定した[7]。

開館前の2016年10月から12月中旬まで4回に渡り「サポーターカフェ」というワークショップが開催された。開館に向けてアイデアを出す市民を「サポーター」として地域広報誌で募ったところ毎回20名から30名ほど集まり、ライブラリーの目標や蔵書のテーマについて意見を出し合った。それまで地域活性化のために行政以外が連続してワークショップをおこなった例はほぼなかったため、参加者の新施設への期待が高まった。

そうして、2016年12月、1階には床面積800㎡、40,000冊の本を収蔵できる国内最大の「まちライブラリー」、2階にはサイバーホイールやボールプールがある屋内型児童遊戯施設「ピッピちとせ（以下ピッピ）」、地下1階には高級人口芝生を使った屋内型ゴルフ場「千歳インドアパークゴルフクラブ（現在は冬季のみ営業）」が営業を開始した。

## 1-3.研究方法・調査の全体概要

本研究では、文献調査、参与観察、聞き取り調査をおこなった。

文献調査では、図書館に関する先行研究や行政資料から、図書館が現在地域のコミュニティの活性化のためにどのような活動を行っているのか調べた。また、千歳市が発行する各種行政資料を用いて千歳中心街の現状を、新聞を用いて市民からの「まちライブラリー＠千歳タウンプラザ」へのイメージについて調べた。

参与観察として、2016年10月から2019年12月にかけてワークショップやイベントへの参加をおこない、利用者やスタッフとの交流を深めた。本格的な聞き取り調査は、2018年４月から2019年12月にかけて、「まちライブラリー＠千歳タウンプラザ」の元メインマネージャーの久重薫乃（ひさしげゆきの）氏・サブマネージャーの古谷綾（ふるやあや）氏を中心としたスタッフの皆さんとサポーター及び利用者の皆さんを対象におこなった。株式会社セントラルリーシングシス

[7] リーシング横山千佳さんよりメールでの聞き取りより。

テム株式会社の 横山千佳 氏にはメールにて質問をさせていただいた。

## 1-4.論文の構成

本稿では、まず、第 2 章で図書館による地域活性化についてまとめ、3 章以降の本論の前提となる議論をおこなう。次の第 3 章では、聞き取り調査と 3 年間の観察をもとに、ライブラリーの基本的な特徴についてしくみ（ソフト）と空間（ハード）に分けて説明する。4 章では 3 章の議論を踏まえつつ、「居場所」について考察する。4 章の前半では、開館の目的でもある「交流」に注目し、「人の居場所」として地域を活性化する様子について述べる。後半では、人が集まることによってライブラリーに集まる様々な「情報」に注目し、「情報の居場所」として開館当初は予想されていなかった役割について実例を挙げながら述べていく。 最後に 5 章では、この研究を通して見えてきた、ライブラリーの課題の解決策と今後を考察する。なお、フィールドワークで得られたデータの論文中での提示については、おもに、(1) 個人の語りやインタビューのやり取りや普通の会話の抜き出し、(2) フィールドノートをもとにしたエピソード記述、の 2 タイプで行う。登場する人物の次章以降での名前の表記は、スタッフは実名で表記し、エピソードや語りなどで登場するサポーターや利用者はアルファベットで表記する。しかし、その人ならではの発言も多いので、脚注に個人の詳細を載せている。

## ２.図書館による地方創生の現状

### 2-1.政府が推奨する図書館の事例

1-1 で述べた「まち・ひと・しごと創成本部」の基本理念として、「各地域がそれぞれの特徴を活かした自律的で持続的な社会を創生する[8]」というものがあり、日本全国で個性のあるまちづくりへの志向が強まっている。各地域が個性を模索する中で、今まで意識されていなかった「本」をアイテムとした個性のある地方創生もはじまった。

文部科学省も図書館が持つ地方創生への可能性に注目しており、ホームページには 14 事例掲載されている[9][10]。地方創生と一口に言っても切り口は多様であり、著者はこの 14 事例を 6 タイプに分類した。

---

8 首相官邸「地方創生」
https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/mahishi_index.html
（最終閲覧 2019 年 12 月 13 日）

9 文部科学省「まちづくり」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/jirei/1346615.htm
（最終閲覧 2019 年 12 月 13 日）

10 この 14 の事例は 2014 年に紹介されはじめたものであり、その後も地域を盛り上げるような魅力的な図書館は多く生まれてきた。私は「札幌市図書・情報館」「みんなの森 ぎふメディアコスモス」を視察した。

「札幌市図書・情報館」は、札幌市の中心市街地に建てられた「札幌市民交流プラザ」に 2018 年にオープンした。「札幌中央図書館」は市の中心部から 30 分ほどかかるため、気軽に立ち寄れる街中の図書館は待望の施設であった。立地も踏まえてターゲットを「都心に集う大人」に絞り、コンセプトを「札幌の魅力や町の情報、ビジネスや様々な課題解決に役立つ情報の提供」に定め、質の高い資料をそろえた。常に最新の情報を多くの人たちに伝えるため、閲覧は館内のみ・座席は時間予約制にした。これは回転率を上げるだけでなく、利用者の読書欲を高めて近隣の書店の売り上げを増加させる効果もあるようだ。ほかにも、セミナーやイベントも開催し、デジタル化・ネット化の時代だからこそ人との交流や五感から生まれる価値を提供している（淺野 2019）。

「みんなの森　ぎふメディアコスモス（以下メディコス）」は、「知の拠点」の役割を担う市立中央図書館、「絆の拠点」となる市民活動交流センター、多文化交流プラザ及び「文化の拠点」となる展示ギャラリーなどからなる複合施設として 2015 年に誕生した。金華山を望むテラスや金華山の山並みを想起させる天井・川船型のベンチなど、自然の眺めと地域の分化を取り入れた地域色溢れる施設である。また、年代ごとにインテリアを変えて使いやすくしたブースや、視覚障がい者を対象にした対面読書の個室など、万人にとっての居心地良い図書館を追求している。また、岐阜市は図書館を核としたまちづくりの先駆けとして、市民の発案で「ぎふまちライブラリー」を開始した。メディコス東側のエリアの喫茶店や寺など 10 軒が共通の本棚におすすめの本を入れ、地図つきのパンフレットを作成して街歩きをしかけている。（参照：「メディアコスモス　図書館発、にぎわい呼ぶ」『朝日新聞』2019 年 1 月 20 日朝刊岐阜全県・1 地方, P25.）

**(1) 図書館が地域に出張して活動するタイプ**
**(2) 地域の活動を図書館の中で出張して展開するタイプ**
**(3) 図書館で地域に根差したテーマを取り上げるタイプ**
**(4) 図書館で社会的テーマを取り上げるタイプ**
**(5) ハードの整備と役割の分散を行うタイプ**
**(6) 公立図書館が地域に小さな図書館を沢山つくるよう呼びかけ、地域全体を一つの大きな図書館にするタイプ**

以下、各タイプについて事例を挙げながら紹介していく。

**(1) 図書館が地域に出張して活動するタイプ**

山形県の新庄市立図書館は、青空図書館をおこなっている。 図書館という 1 つの施設に縛られず、外で活動する。貸し出しのみの移動図書館とは違い、読み聞かせや会話を楽しむことで交流を生み出す。

**(2) 地域の活動を図書館の中で出張して展開するタイプ**

富山県の南砺市立中央図書館 、長野県の伊那市立図書館、福岡県の春日市民図書館が該当する。

このタイプは図書館という老若男女が集う空間で、地域の活動や人を紹介する。地元で行われている活動の情報は意外と手に入りにくいので、公共の場で公開するのは有効である。

**(3) 図書館で地域に根差したテーマを取り上げるタイプ**

静岡県の富士宮市立中央図書館、熊本県の水俣市立図書館、北海道の帯広市図書館、岩手県の一関市立東山図書館がこのタイプである。それぞれ、富士山、水俣病、北海道の農業、和紙をテーマに、講演会や勉強会の開催、展示コーナーや資料の強化をおこなっている。

地域の特産や歴史、課題について地域住民が考える機会を提供し、一丸となって課題の解決に取り組むことで、シビックプライドを高めるだけでなく、環境の改善と人間関係の深化による地域コミュニティの活性が期待できる。

**(4) 図書館で社会的テーマを取り上げるタイプ**

滋賀県の東近江市立能登川図書館は、蔵書による情報提供だけでなく、医療や介護についての講演会や映画上映会などをおこなっている。

これは学びの相乗効果をもたらすだけでなく、ひとつのテーマについて地域住民が考える機会を提供し、一丸となって課題の解決に取り組むことで、環境の改善と人間関係の深化

による地域コミュニティの活性が期待できる。

### (5) ハードの整備と役割の分散を行うタイプ

和歌山県の有田川ライブラリーは、ブックカフェ・絵本美術館・児童向け図書館・分館・電子図書館という５つのしくみをつくり、利用者のニーズに応えている。

施設自体を建て替え、さらに複数の施設に役割を分散させることで、居住地域やライフスタイルに合わせて利用の選択肢を与えることができる。

### (6) 公立図書館が地域に小さな図書館を沢山つくるよう呼びかけ、地域全体を一つの大きな図書館にするタイプ

長野県の小布施町には書店が１軒もない。そこで、町立図書館は地域の店舗に本棚を設置するよう呼びかけ、まちじゅうを図書館にすることを提案した。北海道の恵庭市立図書館も、「恵庭市人とまちを育む読書条例」を制定する際に、小布施町にならってまちじゅう図書館を開始した。岐阜県の飛騨市図書館、島根県の海士町中央図書館の活動もこのタイプである。公立図書館が地域と連携して地域全体を図書館化させているのだ。身近な存在が図書館を運営することは、堅いイメージの公立図書館を住民に身近にさせことができる。

個人や小さな店が図書館をつくると、近隣の住民に読書の機会を提供することができ、オーナーとの交流も生まれる。また、発信力を高めることで未利用者が店に立ち寄る契機になったり、各図書館の導線をつなぐことで街歩きをしかけたりすることもできる。

図書館は公共性を活かし、様々な方法で地域活性に関わることができる。上記で取り上げられている主体はどれも公立図書館であり、個人や法人による私設図書館は挙がっていない。しかし、(6) のような私設図書館の開館は、コストが低く万人が挑戦できる地域活性である。金銭を投入して経済を活性化させるような即物的な取り組みではなく、より多くの住民が関わることのできるよう地域の地盤に眠る活気を目覚めさせることが継続のカギだ。

図書館は利用に即して金銭を必要とせず、万人に開かれている。工夫次第では上記のように図書館というひとつの建物に限定することなく活動範囲を広げることができ、地域住民の交流の促進や地域のテーマを学習することによるシビックプライド [11]の向上にも役立てることができる。

出版業界の不況や書店の廃業など本に関して危機的な現状が問題視される。淘汰の過程にあるのは、本への愛や情熱を捨て去り、日本独自の書籍流通システム [12]でうまく稼いでき

---

11 市民が都市（規模は問わない）に対して持つ自負と愛着。その地域で心地よさや賑やかさといった「良い体験」をすることで市民に自負と愛着が生まれ、さらに市民は地域を心地よく賑やかにするというプラスの循環が生まれる。ここでの「地域」とは、単なる土地だけでなく、そこでの風習や文化、市民の人間性などをトータルに考えたものであり、人間間のコミュニケーションは欠かせない。（伊藤香織・紫牟田伸子編著,2008：6）

12日本の出版業界独自のシステムとして、ランク配本と見計らい本制度がある。ランク配

た出版社や書店である。彼らが流通させてきた炎上商法まがいのヘイト本や、ゴーストライターの自己啓発本などが、読み手からも本への愛や情熱を奪い取ってしまったことが、本離れの原因となり、結果的に出版業界全体に打撃を及ぼしたのだ。人びとは決して本自体を嫌いになったわけではないはずだ。

それは「蔦屋書店[13]」「文喫[14]」といった新しいタイプの書店の誕生や選書サービスなど、本に関する新しい動きが生まれていることから分かる。こういった本への愛や情熱に働きかける活動が、ふたたび読み手を本の世界へ引き戻しつつある。なかでもこれから述べるマイクロ・ライブラリーは、読み手が自ら本の世界に働きかけることのできる活動である。

## 2-2.マイクロ・ライブラリー

### 2-2-1.マイクロ・ライブラリーの概要

マイクロ・ライブラリーとは、公共図書館のように市民全体に開かれた大きな図書館ではなく、地域住民のために開かれた小さな図書館である。まちライブラリー及びマイクロ・ライブラリーの発展に寄与している礒井純充(いそいよしみつ)氏は、マイクロ・ライブラリーの定義として、「(1) 個人の私的蔵書を基本に一部、またはその全部を他者に開放し閲覧提供ないし貸出を行っている」「(2) 図書を通じて自己表現し、活動拠点の活性化、参加者の交流を目途として活用されている」「(3) 運営主体が、個人または小規模な団体によるものであり、法的な規制や制度にしばられない運営がなされている」を挙げている。また、彼はマイクロ・ライブラリーを「(1) 図書館機能優先型」「(2) テーマ目的志向型」「(3) 場の活用型」「(4) 公共図書館連携型」「(5) コミュニティ形成型」に分類している（礒井, 2014:3)。

(1) は、その名のとおり図書館としての本の閲覧・貸し出しを優先している。(2) は、

---

本とは、店の規模の大きさによって自動的にランクが決められ、配本される冊数が決まる制度。見計らい本制度は、書籍の問屋にあたる取次店が、書店が注文していない本を勝手に見計らって送ってくるシステム。出版業界が好況だった頃は、書店は自分で本を選ばなくても良いので評価されていたが、出版不況の現在だと選書に慎重になる必要がある。一方的に送られてくる本の中には、差別を扇動するヘイト本や客層のニーズに合わない本なども多いが、送られて来た以上、書店は即代金の入金義務が発生する。(「なぜ書店にヘイト本があふれるのか。理不尽なしくみに声を上げた 1 人の書店主」『BUSINESS INSIDER』2019 年 3 月 3 日, https://www.businessinsider.jp/post-186111, 最終閲覧 2019 年 12 月 13 日）

[13] カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社が手掛ける書店。同社の TSUTAYA がレンタル事業に力を入れているのに対し、蔦屋書店はライフスタイル事業を主軸としており、カフェや雑貨店、美容室などを併設している。

[14] 六本木にある「文化を喫する」本屋。入場料 1,500 円を払うことで、1 日中店内の本が読み放題、煎茶とコーヒーも飲み放題になる。読むだけでなく気に入った本は別途購入もできる。

少女マンガや絵本など、オーナーの好きなジャンルに特化した本が納められている。(3) は、オフィス内の空いているスペースや自宅の庭など、今まで利用していなかったスペースを活用している。(4) はイベントを公共図書館と共同主催したり、2-1 の (6) のように公共図書館では補うことのできない遠方の地域への読書機会の提供をおこなったりする。(5) は、図書館というスペース・本というアイテムにより人を引き寄せることで交流や地域活動を促進する。

(5) に該当する活動の中で、特に規模の大きいものがある。それが今回取り上げる「まちライブラリー」である。

## 2-2-2.まちライブラリーの概要

「まちライブラリー」とは、2011 年に森記念財団の礒井 純充 氏が「本で人をつなげる」をコンセプトに始めた私設図書館活動である。お気に入りの書籍を持ち寄って共通の本棚に入れ、共有することで、新たな書籍との出会いや地域住民とのつながりを作ることが目的となっている。2-2-1 の分類では原則 (5) コミュニティ志向型に該当する。

2019 年 12 月現在、全国で約 800 か所を超えるまで広がっており、カフェなどの店舗、お寺や神社、病院や学校、自宅やオフィスなどに設置されている。さらには、駅や市役所、公民館といった公共図書館にも広がりを見せている。巣箱型の本棚を自宅玄関前に置く小さなものから大規模な商業施設や大学に併設して人が集える場をつくり、イベントやセミナーを行っているところもある。巣箱型の本棚のタイプだと蔵書数が少ないため、「Take a Book. Leave a Book. (1 冊借りて返す時はできたら 1 冊寄付して)」というルールである場合もよく見られる [15]。オーナーは個人が 70%、NPO や商店街などの団体が 20%、行政や

[15] アメリカのウィスコンシン州でトッド・ボル氏が始めたマイクロ・ライブラリー『Little Free Library (以下 LFL)』のルールある。彼は幼少期に読み聞かせをしてくれた読書家の母への想いから、自宅のガレージのドアの一部で巣箱型の本棚を作り、自宅前に置いた。その後パートナーのリック・ブルックス氏と共にアイデアを広め、メディアで取り上げられたことから急速に運動は広がった。オーナーは、人形の家ほどの大きさの図書箱を自分で作成することもできるし、会に依頼すれば製作したものを購入することもできる。登録したオーナーは「Take a Book. Leave a Book.」と書かれた看板を受け取る。
現在 LFL は毎月 1,000 個のペースで増えていて、全世界 7 か国以上に 20,000 個存在する。『ワシントン・ポスト』では、識字率の向上に貢献していると評価され、『ロサンゼルス・タイムズ』では「見知らぬ他人同士を友たちに変えて、ときにはよそよそしい町内をコミュニティに変える」と評された (礒井 2015:160-164)。
日本では礒井氏が開催する『マイクロ・ライブラリーサミット』や著書で紹介されたことで広まった。世界的に有名な LFR に登録すれば番号の割り当てを受けてインターネットの地図上で検索することも可能であり、より発信できるようになるので、現在ではまちライブラリーを新設する際に LFR にも同時登録できるようになっている。これがまちライブラリーにもこのスタンスがとられる理由である。

企業など大きな組織が 10%となっている[16]。

ライブラリーを始めたい人は、「一般社団法人まちライブラリー」にオーナーとして申請することでホームページに登録される。書籍の寄贈者と閲覧者が専用のメッセージカードを利用して、互いに感想や気付きを交換するしくみもある。蛇腹状になっていて、1 ページずつ記入していき、すべてのページが埋まると運営者により糊付けされてどんどん厚みを増していく。運営者によって、専用のものではなくお気に入りのメモやふせんをメッセージカードにしたり、ノートにメッセージを記入させたりするライブラリーも存在する。自分の書籍が無くても、利用者からの寄贈書籍で育てていくこともできる。

大阪府立大学・もりのみやキューズモールとタウンプラザの 3 館のみ、規模の維持のため会員登録の制度を設けている。500 円でカードを発行することで 3 冊 2 週間の貸し出しや館内でのイベント開催が出来るようになるほか、個別に Wi-Fi の使用やカフェの割引などの特典がある。

[16] 2019 年 12 月 8 日「まちライブラリー@千歳タウンプラザにみんな集まらさる～出会いに感謝の 1 DAY イベント～」のオープニングにて礒井氏の発言より。

## 3.「まちライブラリー@千歳タウンプラザ」という場所の考察

### 3-1.しくみとその役割

#### 3-1-1.蔵書

##### 3-1-1-1.寄贈のしくみと蔵書数の推移

「まちライブラリー@千歳タウンプラザ(以下タウンプラザ)」は、千歳市ではじめての民間図書館となった。本と一口に言っても、文学や評論、ノンフィクションやビジネス、アートや料理、紀行や児童書……とジャンルはさまざまだ。活字嫌いか、あるいはよほどの本の虫でなければ、興味のある本が本屋や図書館に 1 冊もないということはないだろう。そういう意味で、本が集まる場所というのは、本がカバーするジャンルに興味のある人を集める場所になる。地域活性化のために図書館をつくるのは、理にかなった行為だ。会話が自由にできたりイベントも開催できたり、のびのびと使えるルールを制定することで、本に引き付けられて集まった人々のコミュニティ形成を促すからだ。

図書館を名乗るからには、蔵書が欠かせない。特筆すべきはその蔵書が購入ではなく寄贈で成り立っていることだ。さらに「他の人にも読んでほしい、大切なお気に入りの本」でなければならない。ただ「古くなったから」「もう読まないから」「処分に困ったから」という理由での寄贈にならないよう、必ず巻末にメッセージカードを付けることになっている。寄贈時にその場で描くことも可能だが、事前にカードだけ受け取っておいて自宅で記入したうえで寄贈手続きに来る人も多い。

寄贈を頻繁に行っているサポーターの A 氏はこう語る。

> 「なんか自分でコレクション的に集めた本てのはなんか家に置いておいてももうなんかね、ちょっと多趣味だからね、本を色々買ったりするんだけど、でも趣味を増やしすぎると家に物が増えるだけなので、ちょっと、でも捨てるには忍びないしって時にここに持ってきたら皆に読んでもらえるかなともって、アイヌ民族の資料をすごい集めてたんだけどね、やっぱりちょっとね、あの、ほかにも写真もやってるし、手芸も色々やってると、もう家がパンクしてくるからこれは手放して、まあいつでも誰かの目に触れるところに置いてもらえたらなと思って、元々アイヌの蔵書があるの知ってたからそこに加えた方がよっぽど役に立つかなと思って、蔵書したやつをさっき見て来たらすごくね、イイ感じで。ああ、いいねと」[17]

---

[17] 2018 年 5 月 13 日、サポーターA 氏へのインタビューより。A 氏は千歳在住で恵庭のデザイン会社に勤務する女性。千歳の観光サイトの写真撮影やウェブマーケティングを手掛ける。

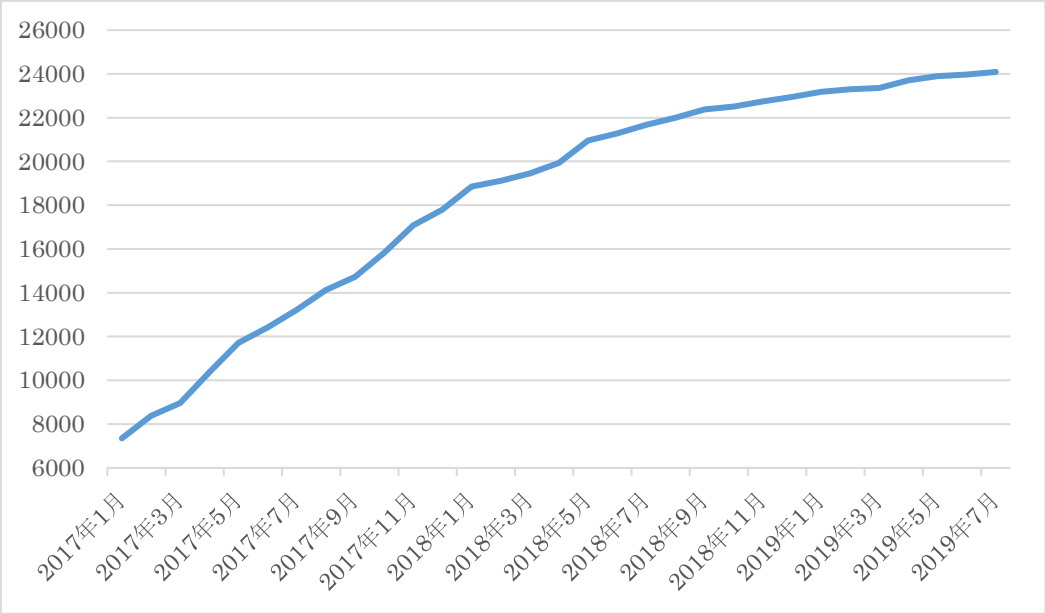



**図 1.蔵書冊数の変化**

（資料）サポーター会議議事録を参考に筆者作成

開館したときから蔵書ゼロからのスタートではなく、全国各地のまちライブラリーから譲渡された 6,000 冊からスタートした。その後市民からの寄贈により、現在約 25,000 冊となっている。21,000 冊を越えてからは、週刊誌・月刊誌・漫画・雑誌の付録としての小冊子・カタログ・全集・百科事典・辞書・パンフレットなどの冊子、また年齢制限のある本・過度な汚れがある本はスタッフが断ることにした。寄贈済みの漫画で全巻揃っていない物やコンビニ販売用に編集されたものは、今後古本市に出店するなどして整理していく予定である。また、現在まで行われてはいないが、今後蔵書で複数ある本や特定のジャンルの本は、コンセプトに合ったほかの新設のライブラリーに移動することもある。

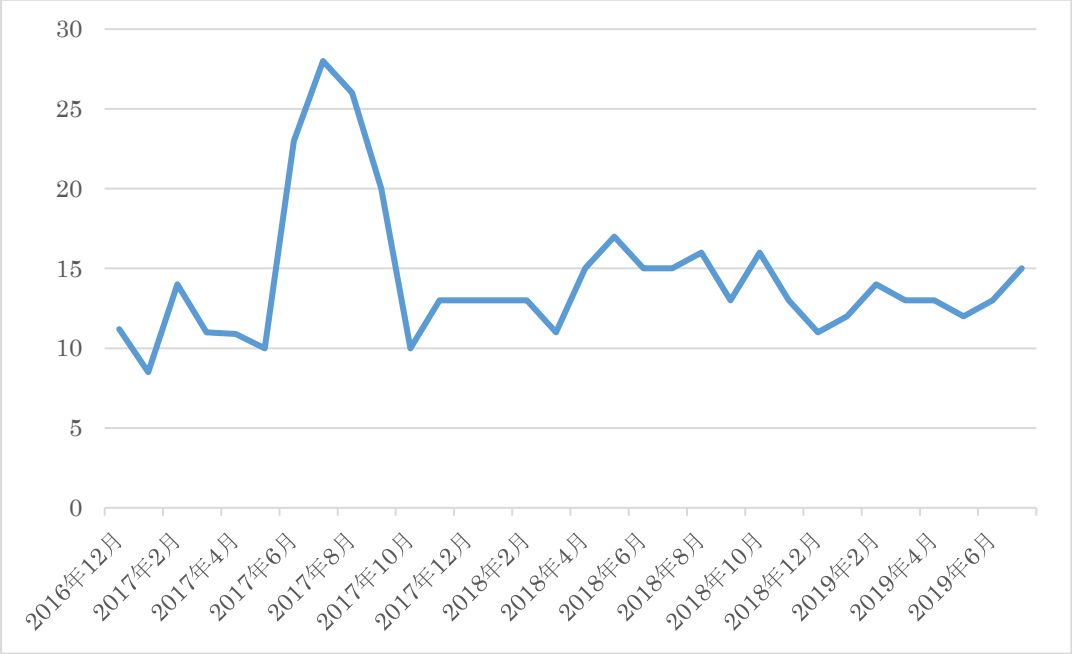



**図 2.1 日の平均貸出冊数の変化**

（資料）サポーター会議議事録を参考に筆者作成

1 日の平均貸出冊数は 10 冊台であることがほとんどである。2017 年の夏の急上昇は、長期休業中の読書感想文や自由研究に使われたものだと予想される。

勿論館内で読むこともできる。市立図書館と違い 1 回に 3 冊までしか借りることができないので、ある程度館内で目を通して吟味してから借りていく人も多い。

### 3-1-1-2.メッセージカード

寄贈本には寄贈者がメッセージカードを付けるのが原則である。そしてその本を読んだ人は任意で感想を書き連ねていく。理想としては寄贈者が「子供が小さい時好きでした」「心がほっとする本です」「とにかく面白い！みんなに読んでほしい」というふうに書き[18]、それを受けて読者が「私も久しぶりに読みました」「おすすめ通り面白かったです」などとつなげていく。

本にカードを付けるというと、小中学校の図書室で巻末に付けられていた貸し出しカードを想像する人も多いだろう。あれは単なる貸し出し履歴であり、そこから得られるのは名前という情報だけである。その貸し出しカードも現在は名前すらもプライバシー侵害の懸念から電子化されているところも多い。

18 まちライブラリー@千歳タウンプラザ「本の寄贈についてのお願い」




**図 3. 蛇腹式の公式メッセージカード**

（資料）礒井氏のお気に入りの冊子とそのメッセージカード。
礒井氏はライブラリーの事例紹介のとき、毎回この写真を使っている。

寄贈者がどのようなメッセージを残すかは、その後の読者の記入にも多少なりとも影響しているようだ。「おもしろかった」というような簡単な記入だけでは、記入が続いていないことが多い。

調査の中でもっとも記入が多かったのは、『フランス人は 10 着しか服を持たない[19]』である。たいていの本は寄贈者以外のメッセージが２つ記入されると「すごい本」、３つ記入されると「かなりすごい本」であるが、この本のメッセージは 15 を超える。まず、寄贈者のメッセージを紹介しよう。

> 「2015 年流行したアメリカからフランスに留学した女の人のフランスに来てからの感動話をまとめたお話です！！服を 10 着しかもたないのはもちろん？その他に食べ物、本など…読んでみてわかることがいっぱいです！！」

さらに読者からのメッセージをいくつか挙げる。

---

[19] 2014 年に発表されたジェニファー・L・スコットによる本。続編やコミック版も刊行され、シリーズ累計 100 万部を突破したベストセラー。フランスのマダムがアメリカンガールに伝えた生活習慣や心得についてまとめられている。

「読んでみたいと思っていたので嬉しかったです。主人公の心のツブヤキ、とても共感しました。日常を楽しむ、自分に自信をもてる暮らし、とっても素敵です。」

「ミニマリストを目指している自分にとって、共感できることが多々あった。この本の生活は、一定の経済力が必要だと思うが、とりいれそうな部分はやってみようと思う。」

「マダム・シックの考え方や行動がすばらしいと思いました。私もできるところは取り入れたいですˆーˆ//」

「参考になったところはどんどんやっていきたいですね。忘れないように手元にあってほしい本かもしれません。全体にパリのおしゃれさがただよう本です。」

1 人 1 人のメッセージが長いことに驚かされる。記入欄はあまり大きくないので、読者が小さい字で想いを詰め込んでいるところを想像するのは楽しい。蛇腹式のカードは 7 人までしか書き込めないので、もうこの本のカードは 2 枚継ぎ足されてアコーディオンのようになっている。

メッセージは１つしか記入されていないものの、面白いやり取りを発見できたのは『人生はニャンとかなる！[20]』だ。

「楽しいネコの写真と偉人たちの名言。『小声なら愚痴叫べばロック』(=ˆ・ˆ=)＜キミの心にどうひびく？」

寄贈者のこのメッセージに対し、読者が記入したのがこれである。

「私の心にひびいたのは、『脱・箱入り娘』自分の気持ちに真っすぐに生きていきたい。」

顔の見えない寄贈者の何気ない問いかけに対し、読者がしっかりと回答している。このように自分の寄贈した本を読者がメッセージも含めしっかり受け止めてくれていることが分かると、また、寄贈しようという想いも生まれるだろう。

[20] 猫の写真にキャッチコピーや格言が描かれた写真集。疲れた現代人や愛猫家の心をとらえ、シリーズも多く出版された。シリーズ累計 200 万部を超えるベストセラー。

### 3-1-2.サポーター制度

ライブラリーは、「サポーター」と呼ばれるボランティアによって成り立っている。

サポーターになるための厳密な条件があるわけではなく、サポートしたい想いがあれば良い。サポートの方法は、イベント開催やトークショーへの参加、カフェのボランティアなど多様である。

毎月後半に1回、「サポーター会議」というミーティングが行われる。これは開館前に行っていたミーティングの延長にあるもので、ホワイトボードに寄せられた意見やカフェの運営、イベントのテーマや蔵書の並べ方などについて話し合っている。昼（14時から15時半）と夜（18時から19時半）の2部制にすることで多くの市民が参加できるよう工夫されている。

サポーター会議によって、さまざまなイベントや企画が生まれてきた。しかし、結局計画途中で頓挫してしまったものや、1度開催したきりでその後どうなったのか共有されていないものも多い。「千歳幸せ図鑑」という飲食店を紹介する地図は、現在も活動中でありかつ会議内や館内のノートで現状が共有化されている。この企画は、利用者からスタッフに「近くでお昼を食べられる場所はないか」「この周りにはほかにどんなお店があるのか」といった問い合わせが多く来ていたことから、礒井氏の地元である大阪の『TAMATUKURI　BROTHER TIMES[21]』を倣って始まった。毎号「カフェ」や「〇〇通り」などのテーマに合わせ、サポーターがライブラリー徒歩10分圏内の店舗を訪問し、手書きで記事を作成する。掲載料などは無いので宣伝というよりも口コミであり、店員の人柄や店の歴史といった「ストーリー」に注目しているのが特徴である[22]。

### 3-1-3.飲食・会話自由

平日に千歳市中心市街地に目立つのは、千歳高等学校の生徒である。彼らの多くは千歳市・恵庭市から通学している。以前はイオン千歳店のフードコートやドーナツショップで自習をする学生が目立ち、飲食をしていないのに長時間座席を確保していることや、消しゴムのカスやシャープペンシルの芯で座席を汚していることが問題視されていた。

---

[21] 大阪市玉造に住む高校生の竹内大さん、中学生の一さん、小学生の光さんの3兄弟による、地域情報誌。手書きの文字と絵、店員の人柄や店の歴史に本人たちの個人的なエピソードを織り交ぜた ややや辛口なコメントが特徴である。

[22] 表紙には必ず「ちーたん」という猫のキャラクターが採用されている。このキャラクターは「ライブラリーにもっと親しみをもってもらいたい」というスタッフの想いから、2017年夏の公募と来館者の投票により生まれた。「本が好き」「千歳の名産の鮭が大好き」「千歳の名産である卵の殻」など地域色を交えた設定で親しまれている。顔はめパネルや神社のようなスペースが設置されており、まちライブラリーの顔ともいえる存在である。

飲食・会話が自由にできる気楽さと便利さは、千歳市立図書館との良い住み分けを生んでいる。市立図書館は読書や調べものに特化しており、基本的に私語は禁止である。書籍の状態や館内の清潔感を保護するため、途中で飲み物を飲んで休憩する際も一旦玄関ホールに出なくてはいけない。サポーターのBさんはライブラリーに利用についてこう語った。

> 「調べものするには図書館だけど、ここはまったりするために来ている。まったりするために、ついでに本読もうかなあって感覚。図書館ではあるけど、居心地よい場所として来ているっていう感じかな[23]」

また、飲食・会話が自由なだけではなく、子どもが靴を脱いで遊びまわることのできるキッズスペースもある（3-2-1 の図 3 の緑のスペース）。小さい子どもを連れた主婦は図書館に通うことに対して心理的な抵抗があるが、会話自由というしくみとこのスペースのおかげで、子供を遊ばせている間心置きなく使用することができる。




**図 4. キッズスペース**

[23] 2018 年 5 月のサポーターB 氏へのインタビューより。B 氏は 2016 年末にタウンプラザを中心に千歳を盛り上げるボランティア団体「みんなの椅子」を立ち上げ、イベントを開催している。

### 3-1-4.イベント

ライブラリーに会員登録すると誰でも館内でイベントを企画運営できる。登録してからイベントに挑戦してみる人もいれば、他の場所で開催していたイベントをライブラリーで開催するために登録する人もいる。

会員が開催するイベントは主に（1）体験型ワークショップ、(2）セミナー、(3）対面型販売、(4）交流会の 4 つに分類される。(1）はアクセサリー制作や生け花教室などで、会議室もしくはテーブル席で行われる。(2）は千歳科学技術大学の教授がドローンや MaaS[24]などについてカフェやテーブル席で講義を行う。(3）は手作り雑貨や古本などの販売であり、主にフリースペースで行われる。(4）は「朝カフェの会」などで、テーブル席で行われることが多い。

スタッフ側が企画し、サポーターが全面協力するイベントも存在する。2019 年 12 月 8 日には、開館 3 周年記念イベント「まちライブラリー@千歳タウンプラザにみんな集まらさる～出会いに感謝の 1DAY イベント～」が開催された。前半と後半の 2 クールに分かれてサポーターによりワークショップやトークショーといったミニイベントがおこなわれた。前半はちりめん細工や手形アートについてのワークショップ、青葉公園 [25]に関するトークショーなど全 10 種のミニイベント、後半にはロボット操作やイルミネーションのワークショップ、支笏湖やコルギについてのトークショーなど全 11 種のミニイベントの充実した内容であった。私が参加した、モバイルアプリを使った千歳バーガー[26]プロジェクトに関するトークショーでは、千歳科学技術大学の学生を中心に多くの市民が参加し、千歳の観光や科学技術についての意見交換で盛り上がっていた。ミニイベント終了後にはカフェ（3-2-3 で取り上げる）にて懇親会も開かれ、ピザを囲んで終始和やかな雰囲気で各々が楽しんでいた。このイベントではじめてライブラリーを訪れた参加者もおり、地域を舞台に様々な分野で活動する人（以下プレイヤー）とのつながりが生まれたことに喜んでいるようだった。

---

24 運営主体を問わず、情報通信技術を活用することにより自家用車以外の全ての交通手段による移動をモビリティという 1 つのサービス業態として捉え、シームレスにつなぐ新たな「移動」の概念。「未来のモビリティがどうあるべきか」という社会の要請から生まれたキーワードである。（参照：「超入門 自動車業界を壊す『CASE』って何だ？」『週刊ダイヤモンド』ダイヤモンド社, 2019 年 11 月 23 日号, p32.）

25 千歳市中心部の南西に位置する、総面積 102.3ha の道内屈指の規模の総合公園。テニスコートやプール、野球場や広場、図書館や公民館など 17 施設からなる。

26 千歳市は鶏卵の生産量が北海道で 1 番多いので、それを使ったハンバーガーを各店が販売している。鶏卵を使うこと以外の制約はなく、たい焼きやホットドッグ、トルティーヤなど様々なタイプが存在する。インスタグラムを利用したキャンペーンも開催している。

## 3-2.空間の役割

### 3-2-1. 本棚

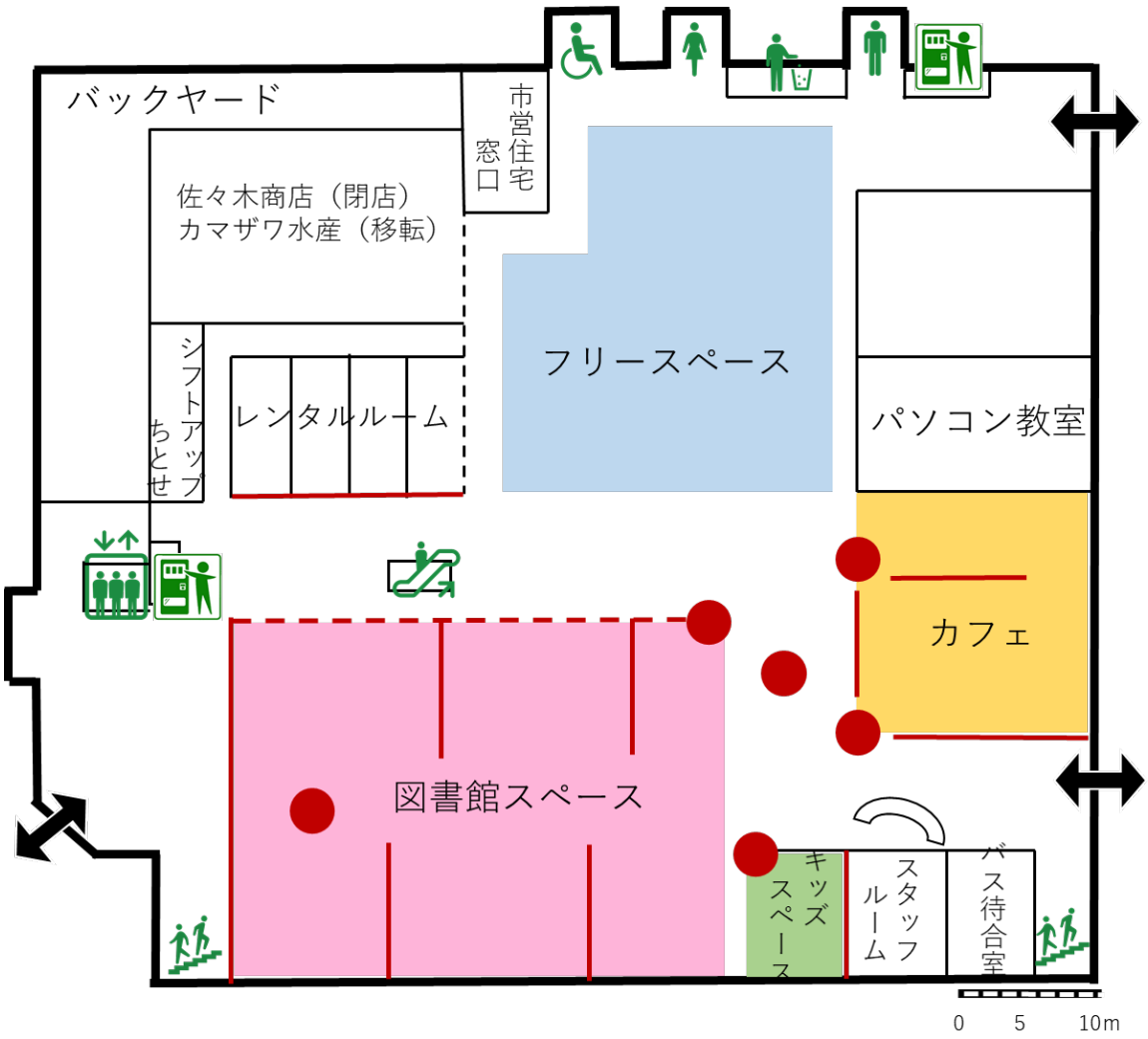



**図 5. タウンプラザ 1 階見取り図**

（資料）スタッフからいただいた手描きの見取り図を参考に筆者作成

ライブラリーは 40,000 冊の本を収蔵できる国内最大の民間図書館である。図 3 の赤丸の位置には円柱型の本棚、赤線の位置には天板のない本棚が空間を仕切るように配置されており、空間を広く見せつつ多くの本が収納できる。隙間から棚の向こう側が見える作りであるためか、本で埋め尽くされているような重々しさはなく、本はあくまで脇役であり、利用者である市民が主役というスタンスを取っている印象を受ける。ジャンルごとに棚が分けられているが、そこまで細かい分類はしておらず、著者名順に並んでいるわけでもない。分

類はスタッフの感性によるものなので、まれに「こんなところにこんな本が⁉」という宝探しのような驚きを楽しむこともできる。これも、3-1-3【飲食・会話自由】の項でB氏が述べた「調べもの目的ではない」というところに影響するのだろう。

図3のピンクのスペースはおもに読書・自習などができる「図書館」的な空間になっており、床面積は約800㎡にも及ぶ。ここにはフェイクグリーンを囲む長椅子や円卓、ベンチやサイドテーブルと椅子のセットなど、様々なタイプの座席がある。学校で勉強するように過ごすか、自宅でリラックスするように過ごすか、そのときの目的や感情に合わせて選択できる。家具のデザインの多様性が、そのまま利用者の属性や過ごし方に反映されている。



**図 6. フェイクグリーンを囲む長椅子**



**図 7. 円形テーブルやソファ**

### 3-2-2.イベントスペース

図 3 の水色のスペースはイベントスペースである。普段はテーブルと L 字型のベンチが置かれ、学生やシニアがお菓子を食べながら話すフリースペースとなっている。対面型販売のイベントが行われる際はベンチが一部撤収される。



**図 8. 通常時のイベントコーナー**

### 3-2-3.カフェ

図 3 の黄色のスペースはカフェである。カフェの周りを囲むように本棚が配置され、飲食ブースと注文ブースの仕切りとしても本棚がある。

カフェでは窯焼きピザと量り売りアイスクリームをメインに、コーヒーやスムージー・アルコールも提供している。主なターゲットはピッピで遊んだ後のファミリーとなっており、土日はかなりの賑わいを見せている。勿論、このスペースで読書を楽しむことも可能だ。

このカフェは開館当初から 2019 年 4 月までは、「まちライブラリー@もりのみやキューズモール」同様「株式会社グリーンズプラネット」が運営していた。5 月から独立してスタッフによる運営に代わり、オリジナルメニューやパーティプランなどにサポーターの意見が反映できるようになり、より柔軟な運営が期待されている。

### 3-2-4.チラシ・パンフレットコーナー

正面入り口からすぐにあるカウンターを抜けると、千歳・恵庭を中心としたセミナーやサークルなどのチラシが置かれているチラシコーナーと、千歳の地域情報誌や観光パンフレットが置かれた千歳情報コーナーがある。また、以前は北海道各地やスタッフおすすめの地域のパンフレットが置かれたコーナーがあった。これは各市町村に呼びかけて収集していたのだが、現在は旅行やアイヌなどのジャンルの本棚に分散して収納されている。



図 9. 千歳のパンフレットコーナー

### 3-2-5.ブラックボード・ホワイトボード

ライブラリーの図書館スペースとカウンターは、一部の壁が大きなブラックボードになっている。図書館スペースのブラックボードは利用者が季節に合わせたイラストを描いたり、イベントの告知情報を書いたりするのに使われている。カウンターのブラックボードはカレンダーになっており、利用者が貸し出しの際に直近のイベント情報を確認するために役立っている。

ホワイトボードはキャスターが付いた移動可能なものであり、常時掲示するために使われている場合と、イベント時に議事録や看板として貸し出される場合がある。以前に常時掲示していたときはふせんを使ったお便りコーナーとして使用されており、「おすすめのお店」「ライブラリーの改善案」などのテーマに沿って利用者が書き込みを行っていた。




図 10.2019 年 12 月 8 日のイベントを告知するブラックボード

### 3-2-6.展示ブース

図 3 の点線部分は展示ブースになっている。市民が趣味で作成した写真やハンドメイド雑貨などの作品や、イベントやキャンペーンで子どもが作成した塗り絵や絵が展示されている。

また、第 29 回ＭＯＡ美術館千歳児童作品展の入賞作品のように外部の企画の作品展示にも利用されることがあり、未利用者の来館のきっかけにもなっている。



図 11. 写真の展示

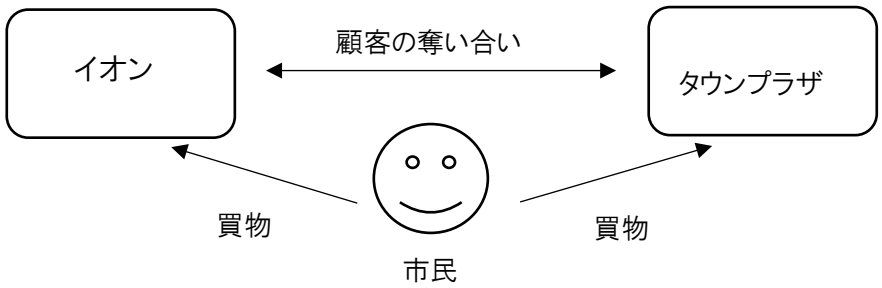


図 12. 塗り絵の展示

## 3-3.利用者からの評判

### 3-3-1.開館前後のタウンプラザの変化

＜開館前＞




＜開館後＞

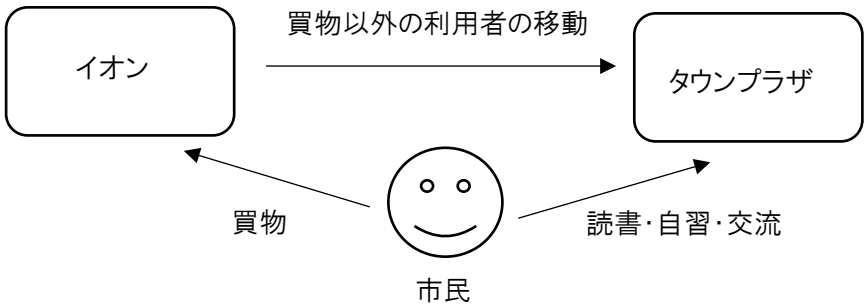



**図 11. 開館前後のタウンプラザの変化**

数年前までのタウンプラザの歴史は、イオンとの闘いの歴史と言っても過言ではなかった。規模が大きく駅にすぐ近いイオンは、駅から少し離れた商店街の中心であるタウンプラザの脅威であった。

ライブラリーを中心としたコト消費型施設に生まれ変わってからは、イオンは購買のための商業施設、タウンプラザは休憩や交流のための居場所として使い分けがされるようになった。

この傾向は放課後に自由な時間ができる学生や日中手持無沙汰なシニアに特に見られる。千歳北陽高校演劇部は「夢舞台 2018 高校演劇　千高＆北陽 with 恵庭南」で、ライブラリーを題材に、居場所のない高校生が自分自身を再発見していくオリジナル作品を披露した[27]。ライブラリーが地域の学生の居場所として認識されていることが窺える。また、学生から

[27] 「千歳、北陽、恵庭南　3 高演劇部上演会＊多彩な競演に拍手」『北海道新聞』2018 年 2 月 17 日, 朝刊地方（札幌近郊）, p18.

「勉強場所が図書館とまちライブラリーしかない[28]」という意見も寄せられている。
利用者のD氏はこう語った。

> 「余暇をゆったり過ごしたい人にここは必要だと思う。今の時代だからこういうのも出てきたんでないかね。ここ（タウンプラザ）は千歳の中心にあたるから、場所的にもいい。通ううちに、もともとは全然知らない人だけど、顔見知りになった人は数人いますよ。本以外にも（待合室にある）テレビだったり、話とかするから。今の時代だからどこでもテレビは家庭の中にあるけれど、こういうところに来て話する楽しさもあるんでないかな、老人ならね、寂しいからね、暇だし[29]」

ライブラリーに人が集うのは、ライブラリーが持つしくみだけが理由ではない。積極的に人を集めるために活動する市民がいるからこそである。「みんなの椅子」というボランティア団体は、ライブラリーの開館と同時に活動を始めた。彼らは、千歳の中心市街地に人を集めるために、ママカフェやフリーマーケット、お祭りなどのイベントをタウンプラザで開催している。

この団体はもともと近隣の別のビルを拠点する予定で、そのビルの所有者は電計系統など全体の修繕資金を負担することを要請してきた。市役所や司会議員も話に加わり、もっと範囲も広げて地域活性を行おうという話になったが、代表のB氏はあくまでタウンプラザを拠点にしたかったため、メンバーの一部が抜けていき、現在の形に落ち着いたという。岩本さんは「（ボランティア団体に所属する）人はかなり減っちゃったけど、私の動きやすい大きさになってくれたし良いかな」と笑いながら、昔の市街地についてこう話した。

> 「清水町ってススキノの次くらいに流行ってるときもあったんですけどね。昔米軍がいたころから兵隊さんの街だったから。元は違うところに商店街があったけど、燃えて移って来た。でもバラックみたいな木の家ばかりだったので一旦火がつくとブワ―っと燃えちゃう。グリーンベルトを作ったのは防火帯というのかな。いっとき歩行者天国とかもあって、子どもを1人で歩かせられないくらい人が多かった。すっかり寂しくなっちゃって、今は平日ひとっこ1人通らないもん、それはちょっと悲しい[30]」

中心市街地の商店街は現在どれも7-8割が夜の経営がメインの飲食店になってしまった。しかも他の地域での経営の練習台として使う店が多いらしく、なかなか根付かない[31]。みん

---

28 「声のラン」『広報ちとせ』令和元年11月10日号, P11.
29 2018年5月8日のD氏へのインタビュー（グループインタビュー）より。
30 2019年11月21日サポーターB氏へのインタビューより。
31 同上。

なの椅子で 2019 年度の忘年会会場として予定していた店も 2019 年 11 月で移転してしまったらしく、私は B 氏から「良い店知らない？」と尋ねられた。

北海道新聞も、開館前は「市内中心部活性化の起爆剤となるか、注目される[32]」、開館後「地域コミュニティー再生の場として期待されている[33]」「約 800 平方メートルの広いフロアでは高齢者がゆったり本を広げ、中高生が自習に励む[34]」というように前向きに紹介している。

勿論、すべての市民がタウンプラザの変化に理解を示したわけではない。長年千歳の商店街を見てきた住民のなかには、寄贈本でなりたつ飲食自由な私設図書館を簡単に受け入れられない人もいる。ライブラリー開館以降市内の書店が 2 店閉店したこともあり、彼らのなかには「あんなところに図書館なんか作ってどうするのか」「図書館のせいで本が売れなくなったんだ」と悪口を言う人もいるが、1 度来館すれば何度も来てくれるようになることが多い[35]。

図書館が書店を潰すかどうかというのは、新刊が公立図書館に並ぶようになってから何度も議論されてきた。結論としては、「その図書館の性質による」だろう。「札幌図書・情報館」は本を貸し出していないという性質ゆえ、利用者の自宅でゆっくり読みたい気持ちを増幅させる。結果、最寄りの書店の売り上げが伸び、新たなビジネスマン層の獲得につながったという（淺野, 2019:23）。ライブラリーは寄贈で成り立つため、基本的に新刊は置いていない。あるジャンルについて読みたくても、新しくても 1 年前の本しか触れることができない。そういった本を読み、最新の現状を把握したくなれば書店に向かうはずだ。しかしライブラリー利用者の多くの目的は 3-1-3 の B 氏のようにまったりすることである。2-1 で述べたように、既存の流通制度に頼って来た書店は本離れに対処できず、閉店に追い込まれたのだろう。

---

32 「タウンプラザ　あす改装開業＊寄贈本６０００冊『民間図書館』、キッズパーク…＊千歳中心部活性化の起爆剤に」『北海道新聞』2016/12/22 朝刊地方（札幌近郊）, P22.

33 「広がる　まちライブラリー＊千歳、登別など道内１０カ所＊本通じ　地域交流の場に」『北海道新聞』2018 年 12 月 1 日, 夕刊全道（社会）, P7.

34 同上。

35 2018 年 5 月サポーターC 氏へのインタビュー（グループインタビュー）より。千歳を中心に活動する写真家で、支笏湖や青葉公園の動植物の写真を展示したり、メディアに掲載するためのライブラリー内のイベントの活動風景を撮影したりしている。

### 3-3-2.最近の館内の変化

開館当初、利用者は未知の図書館との距離感をはかりあぐねていた。しかし、メインマネージャーであった久重薫乃氏[36]やサブマネージャーであった並河真次氏[37]による挨拶や声掛けにより、気軽に話しかけたり本音を打ち明けたりできるような感覚を、利用者は掴むことができるようになった。しかし最近は、スタッフと利用者のコミュニケーションによる問題が表面化してきた。B 氏はサポーター会議で涙ながらに以下のように語った。

> 「最近のスタッフは本当にここの評判を落としている。みんなの椅子のイベントでずっと作業していてもねぎらいの言葉もないし。学生が騒いでいるときに本人に注意せずに、直接学校に行って、学校全体にお触れが出てしまう。だから親も怒って、あんなところ行くんじゃない、と言っている、そういうふうになっているという話が人づてに回って来るんですよ[38]」

スタッフの対応は利用者の減少につながっているのか。学生については、今のところ日によっては「満席で利用できない」と困る子もいるほど数が多く、心配はないように思われる。一方で、サポーターからの信頼を失いつつあることは、サポーター会議の参加人数に顕著に現れている。

---

[36]元メインマネージャーの女性。もともと図書館司書として働いていたが、カウンターの中で完結する仕事に疑問を感じていた。そんなとき礒井氏と出会い、一般社団法人まちライブラリーに入社。ライブラリーの開館にイチから関わる。現在は愛媛にある実家に戻り、家業のミカン農家を手伝っており、今後は地元での図書活動にも邁進するとのこと。彼女のライブラリーへの功績は大きい。「札幌図書・情報館」の淺野館長は彼女が退職することを知らなかったので、2019 年 9 月 29 日の「北海道ブックフェス」にて「ライブラリーは久重氏がいることに意義がある、いなければいけない」と述べた。

[37] 2017 年 7 月から 2018 年 8 月までサブマネージャーとして働いていた男性。現在は大阪のまちライブラリー@もりのみやキューズモールで働いている。

[38] 2019 年 10 月 29 日のサポーター会議夜の部での B 氏の発言より。

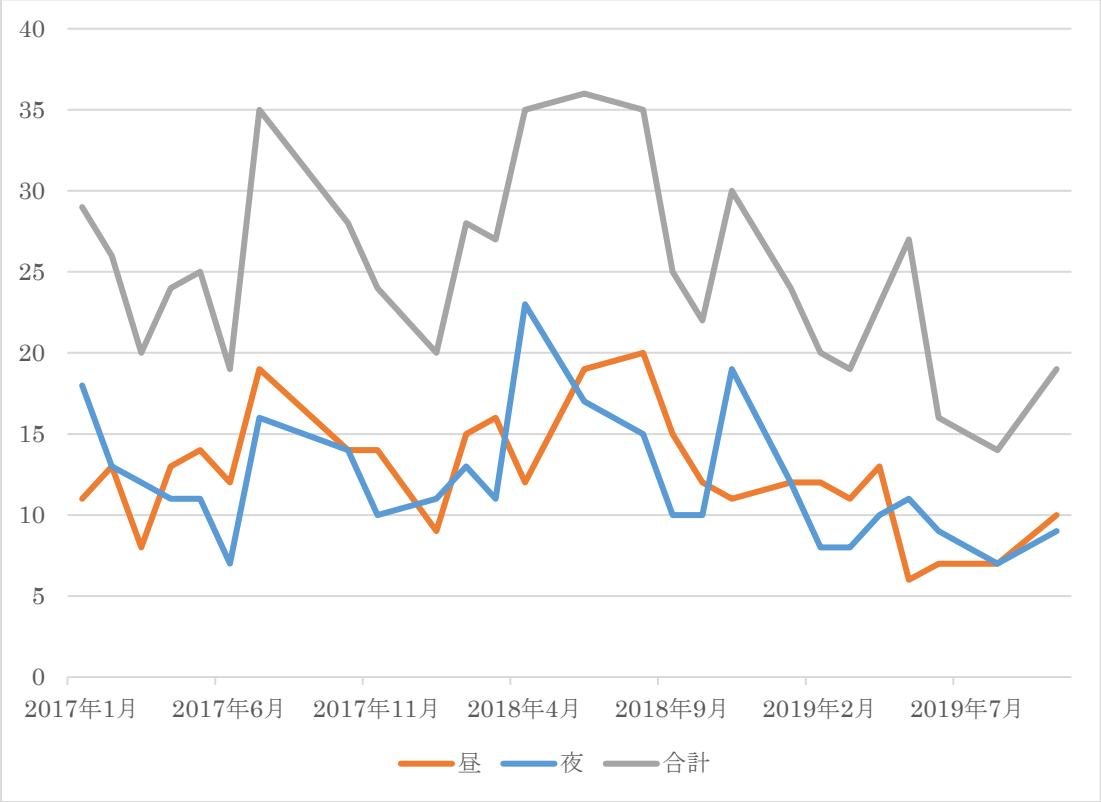



**図 12.サポーター会議の参加者数の推移**

（資料）サポーター会議議事録を参考に筆者作成

2018 年夏をピークに、参加者がどんどん減っている。毎回礒井氏とスタッフ 1～4 名が参加しているので、サポーターだけで数えると 5 人もいないときもある。

2019 年に入ってから、一部のサポーターを中心に「千歳そらのまちづくり委員会（以下そらまち)」が結成された。ライブラリーの目標の 1 つである「本の巣箱の普及」を筆頭に、コミュニティスペースの創設や有識者を招いての講演会などを行っている。彼らはライブラリーの中・もしくはライブラリーに関連することで活動するサポーターという立場から、ライブラリーを飛び越えて千歳全体で活動する「プレイヤー」へと変化している。

ちなみに、そらまちがつくりたい巣箱が全国のまちライブラリー活動と異なる点は、設置場所を人が集まりやすい場所にしようとしている点である。公園や河川敷、商業施設等、巣箱自体は小さくてもそれを囲って交流できる人が多く集まることのできる場所を計画している。現在のまちライブラリーは自宅や個人商店などに多い。オーナーの立場で考えると気軽に始めるには良いが、利用者の立場で考えると見知らぬオーナーの場所に飛び込むにはかなりの度胸を必要とし、ハードルが高い。交流を促し地域コミュニティを活性化させることを重視するなら、多少管理が難しくなっても設置場所を工夫した方が良いのである。

## 3-4.小括

ライブラリーは、人を本でつなぐことを目的としているため、しくみも空間も普通の図書館とは全く異なるものである。この図書館の枠を超えた複合的な施設は開館から約 3 年経過した現在多くの市民に受け入れられており、とりわけ学生やシニアを中心に利用されている。集まっている市民の中には、ライブラリーを含めた中心市街地全体に人を集めるために活動するものもおり、良い循環が生まれている。

しかし、しばしばスタッフとサポーターに壁があることが指摘されている。また、2018 年の夏をピークにサポーター会議の参加者も減少していることもわかった。

次の 4 章では「居場所」というワードに注目し、この章で取り上げたしくみや空間がどのような効果を地域コミュニティに与えたのかについて考察する。5 章ではスタッフの対応も含めた課題や解決策について提案する。

## 4..図書館という「居場所」

### 4-1.居場所の定義

図書館とは基本的にパブリックな空間である。匿名性があり、個人は読書や調べもののために自分の世界に入り込む。利用者同士が顔見知りになることは少なく、司書と利用者の関係も店員と客の関係に近い。一方、ライブラリーはコモンな空間である。スタッフと利用者が顔見知りになることは勿論、通常の利用やサポーター会議などを通じて利用者同士が顔見知り仲良くなることも多く、居場所として認められている。

居場所とは何か。日本建築学会は、居場所[39]とは「ありのままの自分が受け入れられる場所」「自分の役割がある場所」「別の世界への橋渡しをしてくれる場所」と定義した（日本建築学会，2019:13)。私はこの定義を基に、ライブラリーが居場所として認められている理由であろうポイントを以下のようにまとめた。

**(1) 地域にある資源を活かす**
**(2) 立ち寄りたくなる仕掛けをつくる**
**(3) 家具で「居やすさ」を整える**
**(4) ゆるいルールで「居やすさ」を作る**
**(5) 関わる者のニーズを汲み、改変できるような余白をつくる**
**(6) 新しいつながりを生み出す人の居場所となる**
**(7) 新しいつながりを生み出す情報の居場所となる**
**(8) 各機能がつながり混ざりあう**
**(9) 地域のこれからを指し示す**

各ポイントについて解説していこう。

**(1) 地域にある資源を活かす**

ライブラリーは様々なものを活用して成り立っている。建物は取り壊す予定だった大型施設、蔵書は市民が所有していた想いのこもった本であり、なかには戦時中の教科書のように既に一般に流通していないものもある。

千歳市は地価が高いので、土地も貴重な資源である。ライブラリーは千歳駅から徒歩 6 分に位置し、市役所や繁華街にも近いため、市民に利用しやすい。また、北海道を代表する菓

[39] 居場所は居所と同一視されるが、後者は物理的・地理的な面に注目した表現である。前者は存在の社会的・心理的な面を重視しており、快適さや存在願望・他社からの承認が加味されている。

子メーカーである「もりもと」の本店の並びにあるため、観光客も立ち寄りやすい。しかももりもとは 2019 年 12 月にリニューアルオープンをするので、これを受けてライブラリーの利用者の増加が期待される。

図書館の日中の利用者はシニアが多く、立地による利便性が利用を左右する。ライブラリー開館まで市内唯一の図書館であった千歳市立図書館は、千歳駅から約 2km に位置し、徒歩 25 分ほど離れている。入り口前の道が暗く、近年バスの便数も減ったことで、利用者が減少している（西山ほか 2018:39)。

### (2) 立ち寄りたくなる仕掛けをつくる

利用者が飽きないよう何かしらの変化が求められるのが、定期的に通いたくなる施設である。その点、一般的な書店や図書館はあまりこの点に気を遣う必要はないように思われる。すべての書籍を読むことは不可能なので、常に通う目的が存在するからである。

しかしライブラリーには本に触れない人も休憩や交流目的に立ち寄ることが多い。そういった人は、交流したい相手が来なくなれば足が遠のく。季節や月によって掲示物や展示物を変えたり、イベントや企画を計画したりする工夫をすることで、本を読む読まないにかかわらず楽しんでもらいたい。

### (3) 家具で「居やすさ」を整える

初めて来館した人は、まずその内観に驚かされる。背板のない本棚が壁のように配置され、円柱の本棚が柱の役割を果たしている。フェイクグリーンやブラックボードなどを取り入れ、ぬくもりと開放感のある空間を演出している。

音楽も有線のジャズを流していて、落ち着いた空間を作っている。

### (4) ゆるいルールやあいさつで「居やすさ」を作る

(3) のハード面だけでなく、雰囲気も空間を作る大事な要素である。礒井氏が「ライブラリーの利用者がどのようなときに人のつながりを感じるか」調査したところ、全体の 48.6%が「スタッフとの会話」を挙げたそうだ[40]。ライブラリーはスタッフとの会話を楽しめることは図書館としてかなり珍しいことなので、利用者に好意的に受け止められているようだ。それゆえなおのこと、3-3-2 で述べたように、スタッフが利用者へのあいさつを疎かにしたり、学校に直接連絡を入れたりする最近の状況は、あまり雰囲気の良いものではない。

この対応の差はスタッフのスタンスが違うことに由来する。図書館勤務の経験を活かして働きたい人、図書館の司書のカウンター内の業務に物足りなさを感じて応募した人、書店と掛け持ちで勤務する本好きな人、夢の図書館勤務が実った人。各々御理想の図書館像を共

[40] 2019 年 12 月 8 日「まちライブラリー@千歳タウンプラザにみんな集まらさる～出会いに感謝の 1 DAY イベント～」にて礒井氏の発言より。

有しないまま走り出してしまったのだ。

静かに本に親しむ図書館を理想とするスタッフは、キッズスペースで騒ぐ子どもを叱ってしまう。本を踏んだり散らかしたりした場合は本を大切に扱うよう注意すべきである。しかし、交流を妨げるのは違う。子どもでも偶然出会ったほかの子と走り回ったり本を音読し合ったりして、仲良く交流したいのである。

スタッフだけではなく、利用者も雰囲気をつくる。利用者のE氏はこう語った。

> 「一昨日夜勉強してたら、なんか知らない横にいたおば、お姉さんが頑張ってね、ってチオビタくれて、日本人まだあったかいな[41]」

1人で勉強していると、つらくなるときがたくさんあるだろう。そこで見知らぬ人にねぎらわれるのは、努力を認められたようでとても嬉しいはずだ。

### (5) 関わる者のニーズを汲み、改変できるような余白をつくる

サポーター会議は、ニーズをライブラリーに反映させる絶好のチャンスである。「みんなでつくる図書館」と謳うとおり、会議で提案した意見は積極的に取り入れる体制ができている。最近は会議への出席人数が減少しているが、会議という貴重な場を活かさない手はない。

カフェ独立以降、勤務2年目の池田裕理恵氏は、窯焼きポテトをジャックオランタンやスノーマンの形にカットしたり、コーヒーゼリーや蒸しプリンなどのスイーツを商品に加えたり、新メニューを開発している。「マックアドベンチャー[42]みたいに、お子様がつくってレジもして、それをしたいです。エプロンと帽子を持参していただいて、自分が食べるものを作っていただく。親子だけでもいいですし、お子様だけでもいいですし[43]」と目を輝かせて語った。

(6) 以降は次の節から説明する。

---

41 2018年5月8日、E氏へのインタビュー（グループインタビュー）より。E氏は高校卒業後警察学校の入学のため勉強したが落ち、自衛隊に入隊した。しかしやはり夢を諦められずに自衛隊をやめ、インタビュー当時は再び警察学校のための勉学に励んでいた。

42 マクドナルドが全国の店舗で行っている、子ども向けの職業体験プログラム。店員役としてフードをつくり、客役の家族や友人に販売する体験ができる。

43 2019年11月21日のサポーター会議昼の部の池田氏の発言より。

## 4-2.人の居場所

### 4-2-1.老若男女が集う賑わいの場

まず、4-1（6）の人の居場所についてである。ライブラリーはつくられた目的どおりに、様々な年代の市民が集う。利用者は男女比 4：6 である [44]。世代に内訳としては 10 代が約 30%、20-40 代がそれぞれ約 15%、50 代と 60 代が約 10%となっており、70 代や 80 代の利用者も存在する [45]。ここで基本的な 1 日の流れを紹介しよう。

平日なら、午前中はシニアや主婦がまったり読書をしながら過ごす。午後 3 時ごろから学生が急増し、勉強をしながら会話を楽しむ。テスト期間だと席が埋まってしまうほどである。自習に間食は欠かせないようで、コンビニの袋でガサガサと音をたてたり、ハンバーガーショップのフライドポテトの匂いを漂わせたりしているが、特に咎める者はいない。勉強と会話と間食、どれがメインなのか私には判断しかねるが、学生時代ひとり図書室で自習していた身としては、このような青春にも憧れる。夕方午後 6 時ごろになる社会人が増え始める。学生は減ったり増えたりを繰り返し、シニアはこの時間になるとほぼいなくなる。社会人はパソコンで作業や読書をして過ごす。

休日になると朝からピッピを利用するために訪れたファミリーで込み合う。ピッピは 9 月末までは完全クール制をとっており、人数が定員に達すると入場できなかった。そのため時間を潰すために子どもをキッズスペースで遊ばせるケースが多く見られた。また、子どもをピッピで遊ばせている間に親が読書をして過ごすこともあった。午前のクールが終わると遊び疲れた子どもを連れた親がカフェに押し寄せるため、かなり賑やかになっていた。10 月からクール制に加えてフリーパス制が加わり、パス購入者はクールにかかわらず出入り自由になったため、カフェの利用も落ち着き、スタッフも安心しているようだ。休日でも、テスト期間であれば朝から利用しに来る学生もいる。

学生を中心とした 10 代がもっとも多いため、市民の半数の利用目的は「勉強・仕事」となっている。読書は 3 割、貸し出しは 1 割となっており、ほかの全国の大型のまちライブラリーと比べ、本への関心は低い [46]。本への関心が低いにも関わらず、なぜライブラリーを利用するのか。礒井氏は調査で、ライブラリーを利用する理由の 1 位は「居心地の良さ」だと指摘した [47]。4-1 の（2）（3）で指摘したような居やすさ、すなわち居心地の良さが老若男女を引き付ける魅力なのだろう。

---

[44] 2019 年 12 月 8 日「まちライブラリー@千歳タウンプラザにみんな集まらさる～出会いに感謝の 1DAY イベント～」のオープニングにて礒井氏の発言より。
[45] 同上。
[46] 同上。
[47] 同上。

## 4-2-2.プレイヤーが集うはじまりの場

ハンドメイドが趣味の保育士（後述のH氏）やデザイン専攻の大学生、フードドライブをする主婦など、日常生活を送るだけではなかなかつながることのできない人と出会えるのは魅力的だ。自分には縁のない趣味・活動を実際に見てみると、興味が湧くだけでなく、自分の活動の参考にもなる。百聞は一見に如かずだ。

「千歳に面白い施設ができた」と聞いてサポーター会議に参加し始めた現スタッフの古谷綾氏は、もともと千歳に住みながら江別市で学芸員として働いていた。彼女は現在人気漫画「ゴールデンカムイ[48]」について語り合うイベントを開催している。

3-3-2で述べたそらまちは、千歳を盛り上げたい有志の団体である。自分たちがやりたいことや趣味・特技を活かして地域活性を試みるサークルのようなもので、ボランティア団体やNPOとは少し異なる。トヨタを退職して交通を使い地域活性に携わるため千歳にUターンした人、札幌で人気のカフェを千歳にも出店させて千歳にコーヒー文化を根付かせたい人、サポーターやそらまちから市民の声を拾い上げて議会に掛け合いたい市役所職員などが参加している。ライブラリーがこの出会いを生み、活動のきっかけを作ったのだ。

そらまちのひとりであるG氏[49]は、「イロイロリビング（以下イロリ）」という場所をつくった。日曜日から水曜日をだれでも自由に使えるリビングスペースとして開放し、自由に過ごすことのできる場所である。飲食はもちろん、防音加工がしてあるので楽器を演奏することもできる。11月23日にオープンして以来、草木染や飲み歩き、ジャズの演奏会などのさまざまなジャンルのイベントを毎週おこなっている。G氏はオープンに際しこう語った。

> 「千歳に若い人たちの活動拠点をつくりたい、とずっと思っていて、今回1歩踏み出してみると、そういう場所が欲しかった！と言ってくれる人がたくさんいて。千歳って、空港以外特に何もないって言われ続けているけれど、そんなことは全然なくて、クリエイティブで面白い人が、若い人お年寄りも沢山いて、でもそういう人たちが自分を表現する場がまちになかったんだなと、実感しました。だから、クリエイティブな活動拠点は、やっぱり必要なんだ、人と人をクリエイティブが結ぶんだ、結んだ先に、新しい扉があるんだ[50]」

---

48野田サトルによる日本の漫画。明治末期の北海道・樺太を舞台にした、金塊をめぐるサバイバルバトル漫画。『週刊ヤングジャンプ』にて、2014年38号から連載中。累計発行部数はコミックス第18巻の発売時点で1,000万部を突破しており、アニメも人気を博している。北海道では聖地巡礼としてARをもちいたスタンプラリーが開催されている。

49 千歳市市役所の職員で、ライブラリーには開館前からサポーターとして関わっている。札幌市出身で北海道大学を卒業後、千歳市役所に就職した。ちなみにイロリは営利目的ではないので副業には該当しない。2019年に子どもが生まれ、イロリのマスコットキャラクターとして愛される予定。

50 イロリにクラウドファンディングした人へのG氏からのリターンメールより。

クリエイティブというところにイロリの意義がある。ライブラリーには写真やハンドメイド作品などが展示されているが、どれも完成後のものである。展示するだけでは音やにおいに影響はないし、見る人も受動的になる。今まで数回アイドルグループ「小娘（シャオニャン）」のライブや本の巣箱の制作があり、こういったことができるのがライブラリーの長所である一方、ゆったり過ごしたい人に圧迫感を感じさせてしまうのはいがめない。大きい音が出始めてすぐにその場を去ってしまう人もいる。みんながいろいろな過ごし方ができるということは、それぞれどこかでいろいろなことを我慢しなければいけないのである。

そのぶん、最初からクリエイティブな人が集まることを目的としたイロリは、プレイヤーの新たな拠点となるだろう。音もにおいも気にせず、一体となって演奏やアートを楽しみ、能動的に作品に関わる。ライブラリーがしくみ上どうしてもなしえなかったコミュニティを生む可能性がある。

### 4-2-3.個人と社会をつなぐパイプ

さまざまな世代が集まるライブラリーであるが、集めて終わり、では何も生まれない。声を掛けたりイベントに参加したりすることで、新たな居場所が生まれる。F 氏はライブラリーでの印象的な出会いについてこう語ってくれた。

> 「イベントの準備を前にしていた時に、ちらちら見ている男性がいて、結構見てるもんだから、手伝う？って聞くとうんっていって手伝ってくれたんです。その後も子供向けのイベントで綿あめ作るの手伝ってくれたりして、しばらくここで会っていたんですけど、ぱったり来なくなったんです。それでずっと連絡してやっと電話がつながったときに、体が動かない、と言うんです。その人はそういう人（生活保護を受けている独り身の男性）だったので。急いで家に入ったらぐったり寝ていて、もう 5 日も食べていないと。脱水症状も起きてたので急いで救急車を呼んだんですけど。こういうつながりもライブラリーで生まれたもので[51]」

何気ない会話から始まったつながりが、個人と社会をつなぐパイプとなり、人命救助にまでいたった。現代に家族や職場の人間関係を持っていない場合、その人は常に他人から気にかけてもらえる状況にはない。昔は強かった行きつけのお店や町内会との関係も、今では希薄になってしまった。

今回の事例の場合、会話だけでなく、イベントの準備に一緒に取り組んだことが大きかった。1 つの事を協力して行うことは、連帯感や親近感を一気に高める。

[51] 2019 年 10 月 29 日のサポーター会議夜の部での F 氏の発言より。まちライブラリーができる前から「みんなの椅子」に所属しており、現在も活動を行っている。なお、会話に挙がった男性は退院後に老人ホームに入居することが決定した。

## 4-3. 情報の居場所 : 情報拠点

### 4-3-1.ナマモノである情報

次に、4-1（7）の情報の居場所についてである。インターネットで無限の情報が得られる時代に、実際にその場で足を運ぶことで情報を得る意味は何か。五感を使って情報を得られること、対面の交流により情報に記憶や感情が付与されること、情報を得られる人脈や情報を活かした活動場所が見つけられることなどが挙げられる。

また、市民は情報を受発信するメディアであると同時に、本人自体が情報である。つまり、情報受発信の拠点とは、情報の集積場所という意味だけではなく、情報の「居場所」という意味でもある。

プレイヤーが集う場所はコワーキングスペースやコミュニティカフェなどもあるが、こういった場所はほぼ必ず何かしらの本が置いてある。主役であれ脇役であれ、本という媒体はそこにあることで人を集める契機となる。そして本が多様であればあるほど集まる人も多様となる。この役割は現在の市内ではライブラリーでしか担うことが出来ず、かつこれからの未来を指し示す。

図書館自体が本という情報の集合体を持っているが、ライブラリーの特筆すべき点は、その本に付随して別の情報を受発信できる点である。その最たる例がメッセージカードだ。カードに書かれたメッセージは、利用者すべてに向けられている。記入者はほぼ市民になるが、メッセージの読者は居住地と無関係だ。カードの主な特徴は以下の 3 点である。

**（1）金銭的な概念が関与しないことによる公平性**
**（2）地域限定的な匿名性と、それによる安全性・安心感**
**（3）アナログ方式によるぬくもりと責任感**

それぞれについて説明する。

**（1）金銭的な概念が関与しないことによる公平性**

おすすめの本につけることが基本なので、批判・中傷はほぼない。
また寄贈する側に報酬はないので、ステルスマーケティングのような過大評価も少ない。

**（2）地域限定的な匿名性と、それによる安全性・安心感**

市民が主な利用者なので、ある程度記入者が把握できる。「目に見えないつながり」が生まれている。実名を用いる記入者や SNS アカウントも併記する記入者もおり、そこから調べることで記入者をより深く知ることもできる。

### (3) アナログ方式によるぬくもりと責任感

手書きの文字や文章に添えたイラストから記入者の人柄を想像して楽しむこともできる。また本が手元にない状態では修正できないので、いつでも修正や削除ができるインターネットとは違い責任ある記入が求められる。

3-1-1【寄贈】で取り上げたさん A 氏は、カードにも大きな魅力を感じていると語る。

> 「なんかそこ（本棚）にさ、アイヌの本が色々あって、結構どの本にも感想が書いてあるから、人の、同じ本読んだ感想が読めるってなかなかないから、昔からね、本を読むのが好きだったから、一人で読書ノートみたいの作ったり、それこそ mixi[52]なんて使ったことないでしょ？今もあるんだよ！（笑）　本の記録をする機能が付いてて、記録が好きだから結構付けてたんだけど、読んだ本の感想みたいなのをネットで他の人のも見れたりしたから、アナログだけどそれがここならできるなあと思って、それが良いなあと思って[53]」

カード以外にも情報を発信する媒体は存在する。それらを以下の表にまとめた。それぞれについて、次の節で説明する。

**表 2 まちライブラリー@千歳タウンプラザにおける情報の受発信分類**

| | 内へ | 外へ |
|---|---|---|
| **内から** | サポーター会議<br>市内のイベントチラシ<br>（＋ふせん掲示板） | 幸せ図鑑<br>市内のパンフレット |
| **外から** | 市外開催のイベントチラシ<br>市外のパンフレット | |

[52] 2004 年に国内で開始した SNS サービス。日記や掲示板、個別チャットやゲームなどの機能があり、2011 年にはアクティブユーザーが 1500 万人を突破したが、以降は Twitter や Facebook の台頭で利用者が急減した。
（「mixi まだ使っている人、7 割が『毎日利用している』」『ITmediaNEWS』2019 年 1 月 25 日, https://www.itmedia.co.jp/news/articles/1901/25/news071.html, 最終閲覧 2019 年 12 月 13 日）

[53] 2018 年 5 月 13 日、サポーターA 氏へのインタビューより。

### 4-3-2.地域内での情報の受発信

#### 4-3-2-1.広報誌やチラシ

千歳市・恵庭市には地域広報誌「ちゃんと」がある。地域のイベントや求人情報、飲食店のクーポンやペット自慢など盛りだくさんの週刊広報誌だ。ライブラリーのイベントも事前の告知や事後の紹介で記事に取り上げられている。それらの記事はすべてインターネット上に PDF で公開されている。しかしＡ３サイズの誌面をスマートフォンやタブレットで見るのはなかなか骨が折れる。

現在は地域の小さなイベントでもインターネットで検索することが可能だが、電子機器を持っていない人やアナログ派の人が主催者の場合は検索しても出てこない。そもそも検索は特定の目的があるから行われるので、無関心なものや無知なものにまで辿り着くのは難しい。そこで意義を持つのがチラシコーナーである。広告料がかかるわけではないので、万人が気軽に活動の宣伝をできる。活動規模や知名度はチラシコーナーには意味はなく、どのチラシも同じサイズの棚に同じように置かれ、公平に宣伝される。

「札幌図書・情報館」ではチラシを関連するテーマの書籍と同じ本棚に並べる。これは、より効果的にイベントのターゲットに情報を届けるためである。ライブラリーは「本がどこにあるのかわからなくて良い。ここは一期一会を楽しむ、宝探しみたいなもの[54]」なので、イベントだけをチェックしていきたい人のためにも、今のやり方を変える必要はないように思われる。

ふせん掲示板は現在停止している。会議に出ることができない人や、気軽に発信したい学生の発信手段として重宝されているので、今後の再開が望まれる。

#### 4-3-2-2.サポーター会議という最強の出会いの場

サポーター会議の特徴は、最初に最近読んだ本の紹介からはじめることだ。本は個人の興味関心を反映している。感情を言語化するのが得意でなくても、どんな本を読んでいるのかが伝われば一気に相手との距離を縮めることができるものだ。

会議の参加者には、観光や行政に仕事で携わる人がいる。趣味で本を自主制作するシニアの方や、千歳のまちをデザインしたい学生もいる。地域活性ボランティア「みんなの椅子」やハンドメイドサークル「はぴねす」、そらまちなどの団体に所属する人もいる。同じ地域をフィールドにしても様々な分野で活動する人が集まることで、活動状況や今後の展望を共有し、協力したり人をつなげたりすることができる。そらまち自体も会議で知り合ったサ

[54] 2019 年 11 月 21 日サポーター会議昼の部での長尾氏の発言より。利用者が彼女にこのように話したことがあるという。

ポーターたちの輪である。

プレイヤーがイベント以外に自分の活動をアピールする機会はネット以外ではなかなかない。ネットは最初から興味のあることを調べるツールであるので、アピールする対象の層が限られてしまう。その点で、自分の興味関心や特技を地域のほかのプレイヤーに伝えることは、未知のジャンルに触れる機会となり、ライブラリーだけでなく地域全体の活性化につながりうる。どんな小さな活動でも会議で発信してみると、思わぬ出会いや進展があるかもしれない。最近の事例でいうと、2019 年 11 月 21 日の会議でセルフコルギ[55]に夢中になっているサポーターが出席し、参加者一同の注目の的となった。

もちろん、活動と称して化粧品を過度に推奨するようなマルチ商法はご法度である[56]。

### 4-3-3.地域外からの情報の受信

そらまちには札幌市や恵庭市在住の方も参加している。市外在住の人はまず「千歳に面白いのができたらしい」という噂を聞きつけ、とりあえずサポーター会議に参加する。そこで千歳の課題について初見のサポーターと話し、一緒に考えることで、瞬く間に千歳に愛着を持つようになる。サポーターは千歳のために活動する人が多く、地域外の人にお節介なほどに喜んで千歳の話をしてくれる。自分の思い出話や夢を交えながら語ってくれる地域の情報は、その瞬間の生きた情報である。内容だけでなく話し手の声のトーンや表情がのることで、情報がより質量を帯びたものになるのは言うまでもない。市内と市外の交流を促すイベントを開催しているサポーターの H 氏はこう語る。

> 「私は朝カフェの会を運営していて、（朝カフェの会の参加者は）何をするわけでもないんですけど、市外からでもすっごく人が集まるんです。千歳にいっぱい友だち出来るよ、って誘われてくる人が多くて、ただつながりたいって人が多い[57]」

以前まで、地域外から交流目的で千歳に興味がある人が自発的に集まる機会はなかった。

---

55 骨気（コルギ）。骨と筋肉に圧力をかけ、血流を良くしながら骨の位置を強制するという、韓国初の美容法。小顔効果が高いが、かなり痛い（筆者経験済み）。

56 定期的にビューティセミナーと称して化粧品の紹介をする団体が存在し、彼女たちのうちの何人かはサポーター会議に参加したこともある。スタッフの方々曰く、実際に現段階で被害が発生しているわけではないのにブース貸し出しを断ることはできないので困っているそうだ。

57 2019 年 11 月 21 日サポーター会議夜の部にて H 氏の発言より。彼女は大学生と小学生の 2 児の母であり、ライブラリーの近くの幼稚園にて保育士のパートとして働く。「みんなの椅子」で子ども向けのイベントを企画したり、ハンドメイドサークル「はぴねすの会」で市内のイベントを企画したりしている。ほかにも、「朝カフェの会」の運営にも関わっている。

市民は時間と費用をかけて来てくれた市外の人に対し、市内のおすすめのお店を幸せ図鑑とともに紹介したり、カフェ解散後に神社祭を一緒に回ったりして、千歳の魅力を発信する。そこには「千歳を知ってもらいたい」という純粋なホスピタリティ精神がある。千歳にとってライブラリーは、サポーターという生の声が詰まった貴重な情報源である。

市外から来てくれた人も自分の地域について説明や宣伝をしてくれれば、学ぶところも多く理想的であるが、そのような事例をライブラリーで見たことはまだない。館内の本棚に置かれたパンフレットなどで市外の見どころや特徴について知ることはできるが、やはり生の声を手に入れたいところだ。お互いの地域を自慢するようなイベントを開催してみるのが面白いかもしれない。

## 4-4.居場所を生む各機能のつながり

ここで、4-1（8）についてである。3 章で紹介したライブラリーの各機能は、個々に独立しているように見えて実はつながっている。このつながりが、人の居場所や情報の居場所としてのライブラリーの立場を確立するのに貢献している。

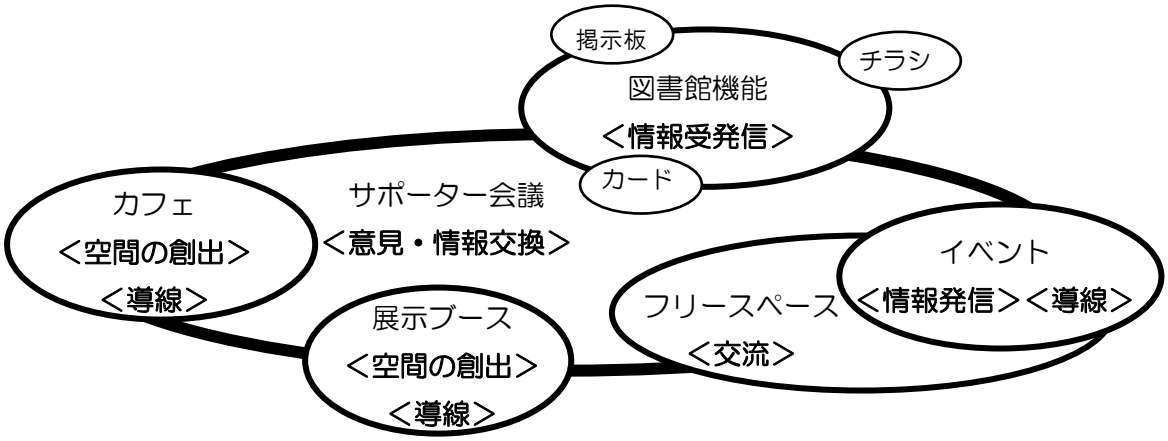



**図 13. まちライブラリー@千歳タウンプラザの各機能のつながり**

ライブラリーの図書館としての機能のなかで、寄贈とメッセージカードは、書籍への想いや記憶を他者に伝達させる役割を持つ。また、チラシコーナーやふせんを用いた掲示板は、地域に関する情報の受発信を担う。本に強い関心がなくても、地域の情報を集めたい人であれば足を運ぶ。

カフェ・イベント・展示ブースは、ライブラリー未利用者に利用のきっかけを与える導線

の役割を果たす。カフェは、飲食を提供すること・おしゃれな空間を提供することで、初の利用者・未利用者の心理的負担を軽減し、利用への敷居を下げる効果がある。カフェだけ利用していた人が壁やパーテーションに飾られた本に興味を持つことで、ライブラリーへの導線になる。フリースペースは、通常は顔見知りの交流の場であり、対面型販売などのイベント開催時は個人が自分の趣味や特技の情報を発信する場になっている。知人がイベントを行っているからという理由で初めて来館する人もいる。展示ブースも MOA 美術館のような有名な展示会であれば、未利用者の来館を促す効果がある。

サポーター会議は、地域のプレイヤーによる情報の受発信の場となっている。お互いがかかわっている活動について報告することで、ライブラリーを中心とした新たな活動の契機になる。サポーターは会議以外でも、幸せ図鑑の作成やイベントに携わることで、千歳の魅力や自身の興味関心を発信している。議事録により欠席者も会議の詳細や今後の動きを把握できる。

カフェ・イベント・展示スペースが図書館としてのライブラリーの導線となり、掲示板やカードで情報に触れる機会を提供する。サポーター会議では各機能について話し合う。このように、各要素が組み合わさることで地域内外双方への情報受発信の役割を担っている。この役割を継続させるには、利用者が書籍やチラシ・イベントによって情報を受信してから、自発的な行動を促すしかけをつくる必要がある.

## 5.ライブラリーの今後

### 5-1.スタッフとサポーターの連携

4-1 に述べたとおり、ライブラリーは立地や家具の配置、しくみにより、利用者が通いたくなるような心地良さ、「居やすさ」を感じるよう工夫されている。問題はスタッフ間の認識の不一致や対応の差だ。従来の図書館のあり方や効率を重視するスタッフの言動により、サポーターや利用者からの信頼度が下がっている。改善の傾向が見られぬまま、開館準備から約 3 年間携わってきた久重薫乃氏が 9 月に退職してしまい、サポーターの中では不安が募っていた。

そのような中で、新しく長尾利華（ながおりか）氏がスタッフに着任した。サポーター会議や本州のライブラリー視察に積極的に参加したり、利用者に笑顔で挨拶をしたりすることで、短期間ですっかりライブラリーに馴染み、皆から親しまれている。

2019 年 11 月 21 日のサポーター会議では「みなさんの力を貸してほしいんです」と切り出し、サポーター各自の長所やアイデアの共有を促した。それまでの会議ではスタッフからこのようなテーマが切り出されることはなく、そもそもマネージャー・サブマネージャー以外のスタッフが発言すること自体が少なかった。

この発言に心を動かされ、「司会の経験があるから、イベントでお手伝いできるかもしれない」「サポーター会議という名前が固くて参加しにくいから、昼の部をサポーターカフェ、夜の部をサポーターバルにしてはどうか」「ハッピーアワーで、お酒とお通しと併せて 800 円とか、飲み放題とかやってみたら面白い。ここら辺は夜のお店は多いけど、昼間からやってるところは少ないし。0 次会にも使えるし、子連れの人は夜動けないから助かる」など、様々な意見が飛び出し、久しぶりに活発な議論が行われた。

今後はサポーターとスタッフが他愛もない会話をするだけのフランクなお茶会も企画されている。ほかにも、幸せ図鑑の取材のついでに一緒に飲食店を訪問するメンバーを募ったり、サポーターがカフェの 1 日店長をやってみたりと、双方の距離を縮めるための提案は増えている。無論提案するだけでは意味がなく、本人が周囲を巻き込んで実行したり、サポートに回ったりして本人が深く関わることが重要である。

いっきに実現することは難しいが、むしろ長い時間をかけることでより深く地域に根付行けるのではないだろうか。そうは言っても、悠長に構えてはいられない事情もある。次の節で説明しよう。

## 5-2.タウンプラザでの存続

1 階に入るテナントは、その施設の顔である。ライブラリーはタウンプラザの顔として、老若男女が集える空間を作って来た。しかし、タウンプラザ自体が老朽化のため 10 年継続できないそうだ。リーシングは「支障のない限り続けていきたい」と述べるにとどまった。

賑わいを取り戻し始めた中心地は、このまま再び衰退してしまうのか。サポーター会議ではつい目先の課題やイベントに注目しがちだが、今一度考えてみる必要があるだろう。

私は、建て替え・近隣への移転などなんらかの方法で、現在と同じような形態で存続することを望んでいる。問題はその資金を調達する方法だ。

現在ライブラリーは主にカフェから収益を得ている。この収益から今のうちにリニューアルの費用を積み立てておくのはどうだろうか。

市役所から補助金を得るという手もある。ライブラリーがコミュニティに与える影響は市役所にも認識されている。市役所は 2017 年度に「若い世代が参画する『(仮称) チャレンジ・スペース』創出事業」に取り組んでいた。これは、市内に住む若い世代にとって魅力・愛着のあるまちにするため、市民が主体となり運営する企画会議と、さまざまな世代の市民がまちづくり活動や起業など多様な取組に挑戦し自由に集えるチャレンジ・スペースを中心市街地の空き店舗・空き家を活用して設置する、というものであった。ライブラリーが市民の交流の場になっていることに加え、フリースペースや会議室において多くのイベントが行われ、多様な市民の交流の場となっていることから、当該事業の目的は達成されているものと判断し、「当事業を完了」とすることとされた。このように行政もライブラリーを交流拠点として認めているのだから、市民が団結して申請すれば資金補助を得られるかもしれないし、みんなの椅子結成当初のように全面的に協力してくれる可能性もある。

ネーミングライツ [58]という手段も考えられる。今年、JR 長都駅は「キリンビール北海道千歳工場前」、JR 恵庭駅は「北海道文教大学前」という副駅名が付いた。ネーミングライツは施設にとって安定した収益を得る有効な手段となる。しかし、リーシングによると現在の段階ではライブラリーにはネーミングライツを導入する予定はないとのことだ [59]。

ほかにも資金調達の方法はある。現在はクラウドファンディングが注目を浴びており、イロリもタウンプラザの向かいにあるズンバ教室 [60]もクラウドファンディングにより資金調

---

58 ネーミングライツとは、主にスポーツ施設や文化施設に、企業などがお金を払って会社や商品にちなんだ名前を付ける権利。権利を売る施設側は収入を運営費などに充てることができ、企業側は多くの市民が利用する施設を通じて会社の宣伝ができる。プロ野球の球場やサッカー J リーグのスタジアムに多く見られる。道内では「ニトリ文化ホール」がよく知られている。千歳市の施設では「北ガス文化ホール（千歳市民文化センター)」や「ダイナックスアリーナ（千歳市スポーツセンター)」がある。
（参照 :「＜一から十勝＞『ネーミングライツ』って何のこと？＊施設の名前を付ける権利」『北海道新聞』2019 年 8 月 2 日, 夕刊地方（帯広・十勝）, P 7. ）

59 2019 年 9 月 26 日メールのインタビューにてリーシングの横山氏より。

60 ライブラリーの隣の小道に 2019 年 12 月に開業したズンバ教室「Studio 風」。北海道主

達をおこなった。「地域クラウド交流会」という交流型のクラウドファンディングも、ライブラリーで過去 4 回開催されている。礒井氏曰く、千歳は他の地域に比べ、自分では始められないけれど他の人の活動を手伝ったり応援したりするのは好きな人は多いとのことである[61]。この特性を嘆くのでなく積極的に活かし、資金を集めることも不可能ではない。

催創業ビジネスグランプリで地域大会 1 位を獲得し、クラウドファンディングサイト「ACT NOW」では目標 200,000 円の 5 倍の 1,000,000 円を集めた。体を内側外側両方から綺麗にすることを目的に、ズンバ（ダンスエクササイズ）とヨガの講座を開き、週末には手作りの米粉ベビーカステラの販売をおこなっている。

[61] 2019 年 9 月 29 日、サポーターH 氏との対談での礒井氏の発言より。

## 5-3.役割の見直し

何度も述べた通り、全国のまちライブラリーは基本的に人をつなげることを目的としている。4 章では千歳のライブラリーも同様の目的のもとに「人の居場所」として活躍していることを述べた。私がここで注目したいのは、「つなげる」の意味である。

千歳のサポーターは、それまで個別に活動していたプレイヤーがライブラリーによって生まれたつながりであるため、ライブラリーへのこだわりが強い。礒井氏は、「千歳のサポーターはイベントの開催や活動拠点としてライブラリーを活用するために、どうやってテナントの管理会社であるリーシングからの許可をもらうかばかり考えている[62]」と指摘する。「相手を変えるより自分が変わる方が早いので、別の活動場所を考えた方が良い[63]」とアドバイスした。

提唱者がこのようにライブラリーへの執着がないのは意外だったが、ライブラリーの役割はあくまで「つなげる」こと。つまり交流の創出の場であり、維持・活用の「つなぎとめる」場ではないと捉えると、サポーターももっと柔軟に活動できるのかもしれない。

実際にライブラリーを飛び出して柔軟に動き出しているのがそらまちだ。彼らが主体となって行っているイロリや「本の巣箱プロジェクト（以下巣箱)」の動きもどんどん本格化している。最近は特に、2019 年 12 月 20 日に市内のグリーンベルトで開催するイルミネーションの点灯式のために邁進している。彼らの精力的な活動には目を見張るものがある。このままリーシングによる運営方針やスタッフの対応に変化がない状態が続けば、タウンプラザ存続について議論する前にライブラリーの役割が分散する可能性がある。具体的には、交流による＜情報の受発信＞＜意見・情報交換＞や 4-2-2 で述べたようなクリエイティブな活動の発展はイロリに、書籍による＜情報の受発信＞は巣箱へと移るかもしれない。これでは、情報拠点としての役割を失うだけでなく、貴重なプレイヤーたちがライブラリーから遠のき、人の居場所としての役割も一部失われてしまいかねない。

新たなプレイヤーの拠点が生まれるのは喜ばしいことではあるが、それが既存の拠点を衰退させる原因になってはいけない。ライブラリーは今後、交流の創出のために、独特のしくみと広大な空間という強みを生かした展開方法を考えていく必要がある。

62 同上。
63 同上。

## 5-4.小括

この章では、今まで勤務していたスタッフとサポーターの壁を取り払うような新たなスタッフが入ったことによる希望が生まれた一方、タウンプラザ自体の寿命のため、ライブラリーの存続が危ぶまれていることについて述べた。そのうえで、どのような存続手段があるか、どのような役割を重視していくか考察した。

私は描く理想は、5-2 のような方法でライブラリーが 10 年後も市民の協力によりなんらかの形で残り、そこを中心としてサポーターが集まること。その中からライブラリーを飛び出すようになったプレイヤーが個々の関係を維持しつつ各地に巣箱をつくり、地域の中で交流や活動を行うことのできる居場所を増やし続けていくことである。

## 6.結論

本稿では、まちライブラリー@千歳タウンプラザを事例に、図書館が地域の居場所として認められることで情報の拠点の役割を果たす意義と可能性を考察することを目的として議論を進めてきた。

まず 2 章では、図書館が持つ地域活性のポテンシャルを確認するため政府が推奨する事例を取り上げた。これらの事例はどれも公立図書館が主体、もしくは中心となった活動であり、市民の力のみでなされた活動にはまだ注目されていないことが分かった。そこで、市民が中心となり自発的に行う活動であるマイクロ・ライブラリーの基本的な紹介をおこなった。3 章では、まちライブラリー@千歳タウンプラザが持つしくみや空間づくりの特徴を紹介し、それらにより生まれたライブラリーの変化をまとめた。タウンプラザとしては他の商業施設との住み分けに成功し、市民が思い思いに過ごすために足を運びやすい施設となったが、一方でスタッフの対応によりサポーターがライブラリーを離れつつあることがわかった。4 章では、ライブラリーが持つ「居場所」としての役割を考察するため、居場所の価値を定義した。そのうえで 3 章を踏まえて、ライブラリーが人をつなげることがどのような影響を及ぼすのか、「交流」と「情報」という 2 つの観点から考察した。ライブラリーは本を囲んだ出会いを目的に開設されるが、そこから生まれるのは対話や読書による穏やかな時間だけではない。ライブラリーは地域のプレイヤーがサポーターとして集まりやすい場所だからこそ、彼らが持つ地域の生きた情報が集まり、地域活性の拠点となる。一般の利用者もサポーターの会議に参加して気軽にサポーターになることができるし、議事録やノートで会議やイベントの動きを把握できる。地域の情報を集め、発信し、新たな発信者を生み出す場としてこれほどふさわしい場はない。5 章ではスタッフが今後どう変化していくのか、地域のプレイヤーがどう関わっていくのか予想しながら、今後のライブラリーの存続について提案した。また、現在のタウンプラザから移動や建て替えすることで存続の可能性はある一方、今後のスタッフの対応や運営方針の改善がなければその存在意義が失われてしまうおそれについても触れた。

2016 年に何気なく参加したワークショップから始まった約 3 年間の研究のなかで、私は地域の数多くのプレイヤーに出会う機会を得た。ライブラリーに関わったことで、千歳にわかファンであった私は、プレイヤーの活動や言葉に感銘を受け、千歳のために実際に商店街の活性化事業やライブラリーのトークショーなどに関わらせていただくようになった。出会いを誘発するライブラリーの恩恵を最も受けたのは私自身だったのかもしれない。

## 謝辞

本論文の執筆にあたり、聞き取り調査にご協力いただきました、「一般社団法人まちライブラリー」代表の礒井純充様、「まちライブラリー@千歳タウンプラザ」のスタッフの皆様とサポーターの皆様、「株式会社セントラルリーシングシステム株式会社」横山千佳様に、心から感謝を申し上げます。お忙しいところ時間を割いていただき、誠にありがとうございました。

また、研究・執筆に関してご指導いただきました指導教官の宮内泰介先生をはじめ、地域科学研究室の先生方、先輩方、同期生にこの場を借りて心から御礼申し上げます。

## 参考文献

淺野隆夫，2019，「『常識のカバーを外そう』～札幌市図書・情報館が変えたこと、変えなかったこと～」『カレントアウェアネス』国立国会図書館，340:20-23.

礒井純充，2014，「新時代におけるマイクロ・ライブラリー考察」『カレントアウェアネス』国立国会図書館，319:2-6.

礒井純充，2015，『マイクロ・ライブラリー　人とまちをつなぐ小さな図書館』学芸出版社

伊藤香織・紫牟田伸子監修・シビックプライド研究会編，2008，『シビックプライド―都市のコミュニケーションをデザインする』宣伝会議.

西山有子＆久重薫乃，2018，『まちライブ 02』一般社団法人まちライブラリー.

日本建築学会，2019，『まちの居場所　ささえる/まもる/そだてる/つなぐ』鹿島出版社.